

令和4年度全国学力・学習状況調査

貝塚市の結果

貝塚市教育委員会

目次

1. 調査の概要について	P 1
2. 結果の概要について	P 2
1) 領域・問題別の正答の状況と課題について（小学校）	P 3
2) 領域・問題別の正答の状況と課題について（中学校）	P 6
3. 基本的な生活習慣等について（児童生徒質問紙調査より）	
1) 授業に関すること	P 9
2) 家庭学習に関すること	P 15
3) 規範意識、自己肯定感等に関すること	P 19
4) I C Tの活用に関すること	P 23
4. 今後に向けて	P 27

令和4年度 全国学力・学習状況調査 貝塚市の結果

4月19日に文部科学省により全国の小学6年生、中学3年生を対象に「令和4年度全国学力・学習状況調査」が実施されました。今年度は国語、算数・数学、理科の3教科の実施となりました。

貝塚市教育委員会は、この分析結果を保護者や地域の方々と共有し、今後の教育施策や学校の取組みに活かすことにより、本市の教育を一層充実させてまいります。

なお、この学力調査により、測定できる学力は特定一部分であり、学校における教育活動の1つの側面を表すものであることをご承知ください。

1. 調査の概要について

(1) 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- 以上のような取組みを通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 対象学年

- 小学校及び支援学校小学部第6学年
- 中学校及び支援学校中学部第3学年

(3) 調査内容

I. 教科に対する調査

○小学校調査は、国語、算数及び理科とし、中学校調査は、国語、数学及び理科とする。出題範囲は調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は以下のとおりとする。

- ・身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

II. 質問紙調査（児童生徒に対する調査、学校に対する調査）

(4) 実施日 令和4年4月19日（火）

2. 結果の概要について

小学校

(%)

	貝塚市	大阪府	全国
国語	61	64	65.5
算数	62	63	63.2
理科	58	60	63.3

中学校

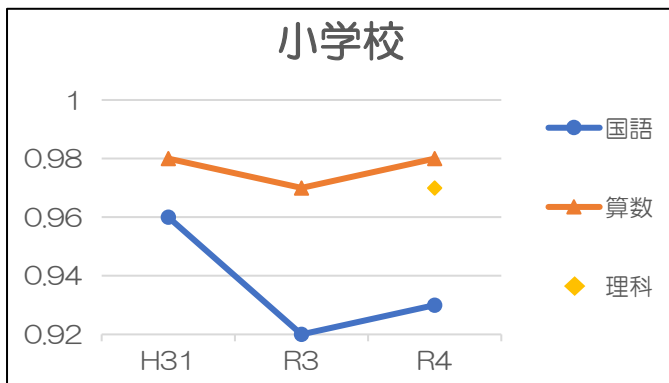
(%)

	貝塚市	大阪府	全国
国語	64	67	69
算数	47	51	51.4
理科	44	49.3	47

※「貝塚市」、「大阪府」、「全国」としているのは、「貝塚市内公立学校」、「大阪府内公立学校」、「全国の公立学校」の平均正答率(%)を表しています。

教科・区分別正答率比較/対全国比経年比較

貝塚市の平均正答率を全国の平均正答率でわり、全国の正答率を1(基準)としたときの貝塚市の数値を経年で比較しました。



(小学校)

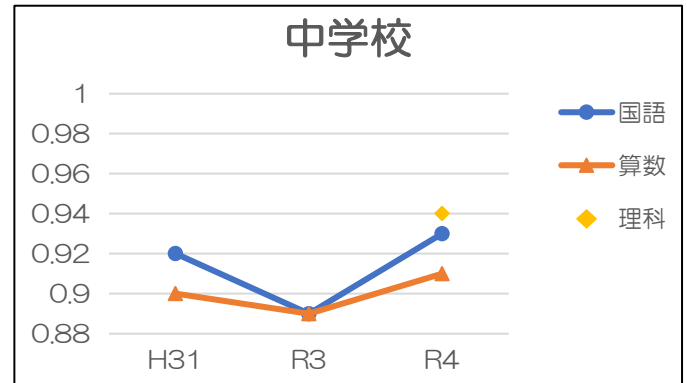
国語：平成31年度から令和3年度にかけては大幅に下降しましたが、令和4年度は0.92から0.93と0.01ポイント向上しました。

算数：平成31年度から令和3年度にかけて微減となっていました。

令和4年度は0.97から0.98と0.01ポイント向上し、国平均に近づきました。

理科：国を1としたとき、0.96という結果となりました。

☆3教科とも対国平均0.95以上の結果となりました。



(中学校)

国語：平成31年度から令和3年度にかけては大幅に下降しましたが、令和4年度は0.89から0.93と0.04ポイント向上しました。

数学：平成31年度から令和3年度にかけて大幅に下降しましたが、

令和4年度は0.89から0.91と0.02ポイント向上しました。

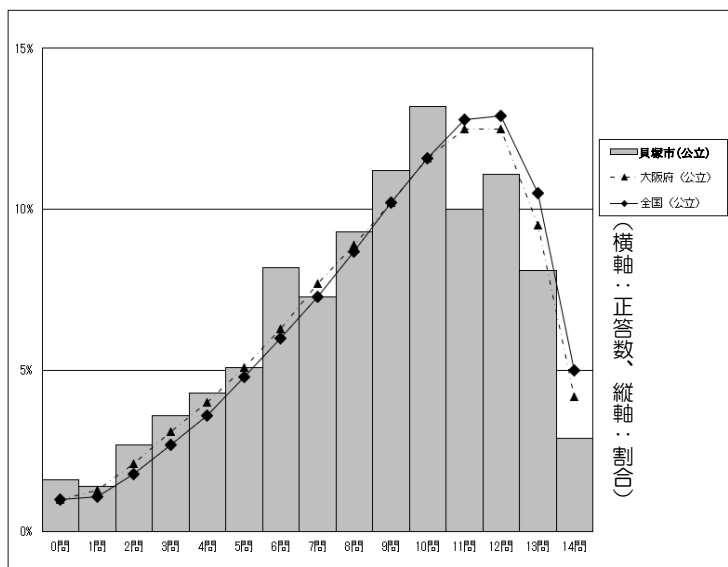
理科：国を1として0.93という結果となりました。

☆3教科とも対国平均0.9以上の結果となりました。

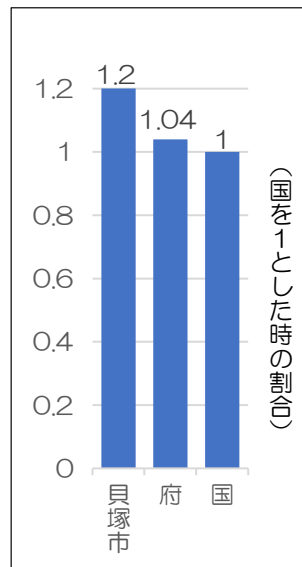
1) 領域・問題別の正答の状況と課題について（小学校）

<国語>

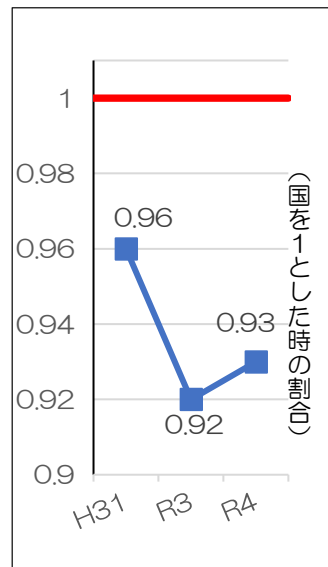
正答数の分布



無解答率の平均



正答率の推移



評価観点・問題形式別正答率(%)

		貝塚市	大阪府	全 国
学習指導要領 の内容	(1)言葉の特徴や使い方に関する事項	63.6	67.5	69.0
	(3)我が国の言語文化に関する事項	70.4	74.2	77.9
	A 話すこと・聞くこと	64.5	64.4	66.2
	B 書くこと	44.9	46.0	48.5
	C 読むこと	62.4	65.9	66.6
評価の観点	知識・技能	64.7	68.6	70.5
	思考・判断・表現	58.5	60.5	62.0
問題形式	選択式	68.7	70.4	71.8
	短答式	55.1	61.7	63.6
	記述式	47.4	49.4	51.3

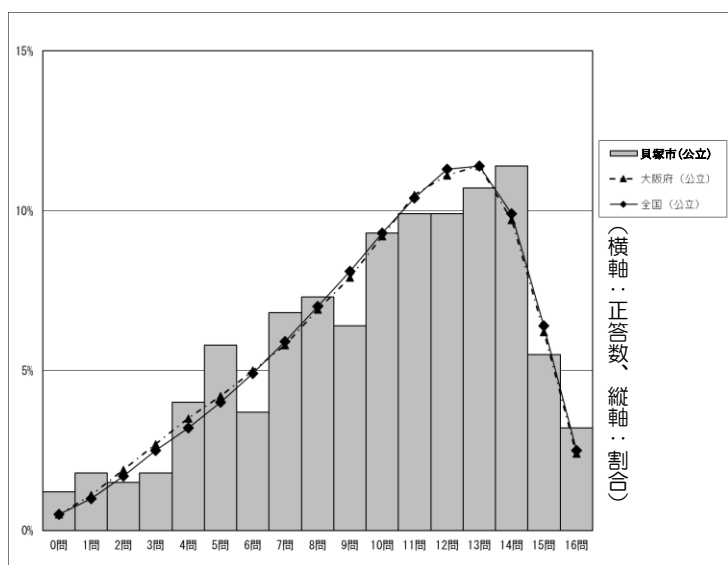
○小学校国語は、正答率が全国平均を 4.6 ポイント下回りました。評価の観点全項目で全国平均を下回っていますが、全国を1としたもので経年比較すると、令和3年度から 0.01 ポイント向上しています。また、知識・技能の正答率も全国平均から下回っているものの、令和3年度と比べると向上がみられます。

○思考力・判断力・表現力の正答率が、全国平均よりも 3.5 ポイント下回っており、特に、「書くこと」の文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整えることが本市の全体的な課題であるといえます。また、知識・技能の特に漢字を書く問題の正答率が全国よりも 8.6 ポイント下回っているため、漢字の知識についてもしっかりと取り組んでいくべき課題であるともいえます。

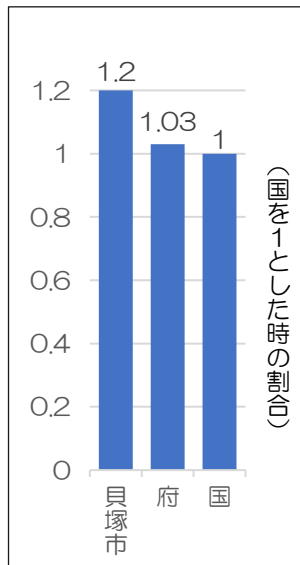
○無解答率は、全国の 1.2 倍で、高い現状ですが、令和3年度は 1.6 倍だったことから考えると改善がみられます。

<算数>

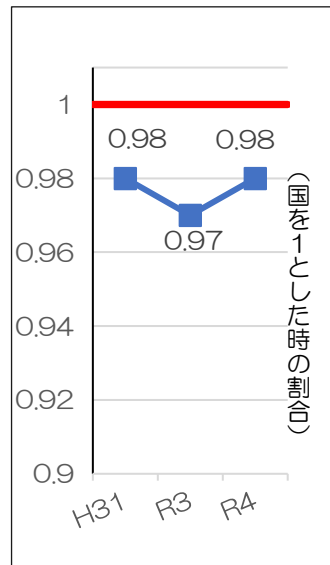
正答数の分布



無解答率の平均



正答率の推移



評価観点・問題形式別正答率 (%)

		貝塚市	大阪府	全 国
学習指導要領の領域	A 数と計算	68.6	69.1	69.8
	B 図形	59.2	62.9	64.0
	C 変化と関係	53.1	51.2	51.3
	D データの活用	68.0	68.7	68.7
評価の観点	知識・技能	67.2	67.9	68.2
	思考・判断・表現	55.3	55.7	56.7
問題形式	選択式	50.1	51.3	51.8
	短答式	75.5	76.2	76.5
	記述式	59.4	59.0	60.2

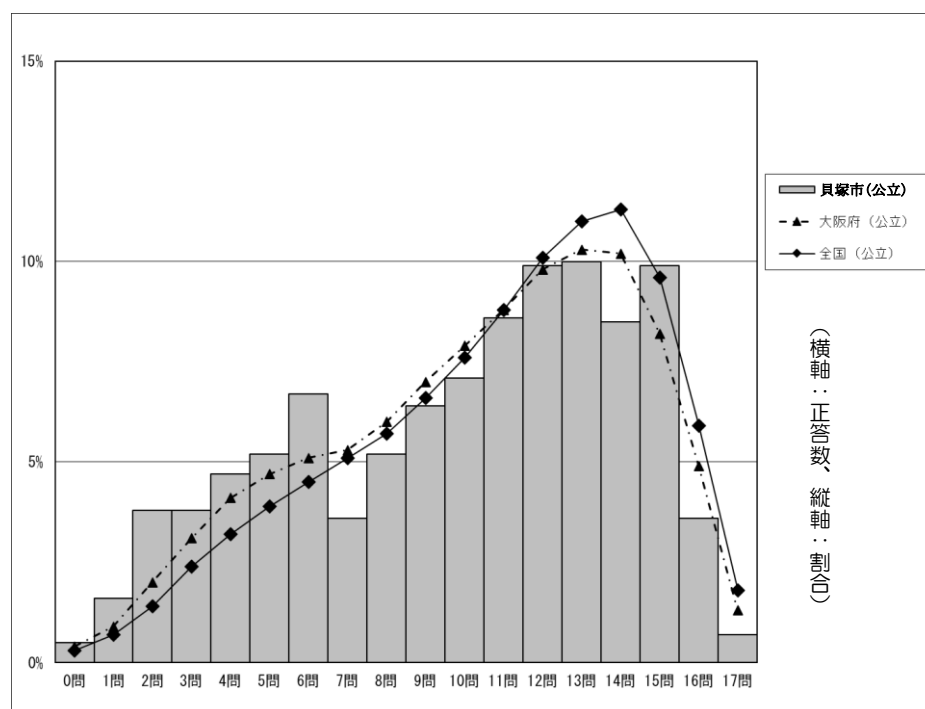
○小学校算数は、正答率が全国平均を 1.2 ポイント下回りました。全国正答率を 1 としたもので経年比較すると、令和 3 年度から 00.1 ポイント向上しています。学習指導要領の領域の「C 変化と関係」は、全国平均よりも 1.8 ポイント上回っています。また、評価の観点は 2 観点ともに全国平均を下回っているものの、令和 3 年度と比べると向上がみられ、全国正答率を 1 としたもので比べると、どちらも 0.99 となっており全国平均に近づいています。

○学習指導要領の領域の「B 図形」は、全国平均よりも約 5 ポイント下回っています。この領域の問題では、プログラミング的思考を問う問題が出題されたため、今後は、プログラミング的思考を育成できるような授業改善を進めていきます。また、割合について、日常の場面に対応させながら理解することや、図や式などを用いて基準量と比較量の関係を表したりすること、また、日常的な事象を数学的に解釈する力に課題が見られました。

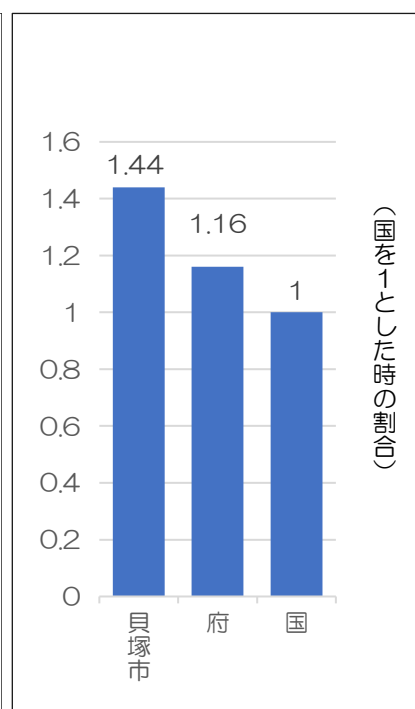
○無解答率は、全国の 1.2 倍で、高い現状ですが、令和 3 年度は 1.5 倍だったことから考えると改善がみられます。

<理科>

正答数の分布



無解答率の平均



評価観点・問題形式別正答率（％）

		貝塚市	大阪府	全 国
学習指導要領の領域	「エネルギー」を柱とする領域	48.5	49.0	51.6
	「粒子」を柱とする領域	50.6	56.8	60.4
	「生命」を柱とする領域	70.8	72.3	75.0
	「地球」を柱とする領域	59.2	61.0	64.6
評価の観点	知識・技能	55.0	59.5	62.5
	思考・判断・表現	59.2	60.9	63.7
問題形式	選択式	63.0	64.5	66.8
	短答式	52.4	61.4	66.2
	記述式	43.8	44.3	47.3

○小学校理科は、正答率が全国平均を 5.3 ポイント下回りました。評価の観点全項目で全国平均を下回っています。

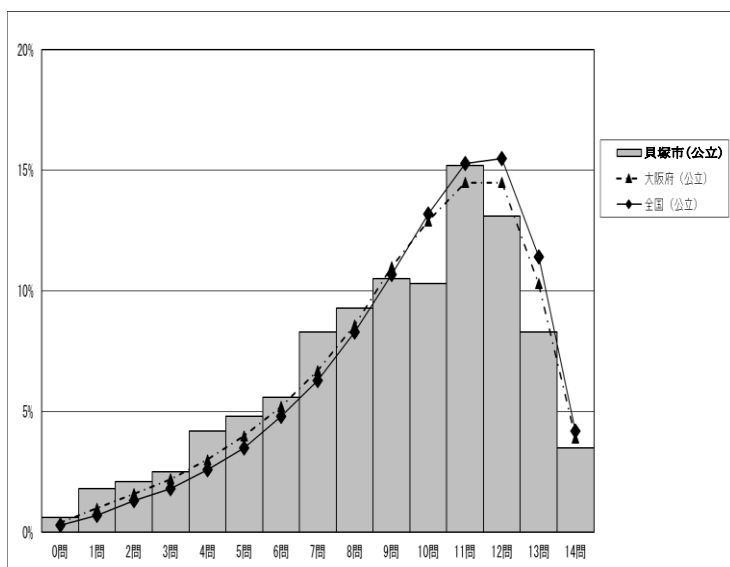
○知識・技能の「日光は直進することを理解している」ことを問う問題では、全国の前答率より 0.5 ポイント上回っています。また、思考・判断・表現の「実験結果を分析し、自分の考えをもつことができる」ことを問う問題についても、全国の前答率より 0.2 ポイント上回りました。しかし、実験器具のメスシリンダーの名称を記述する問題の前答率が 41.8%であったり、無解答率が約 12%ある記述問題もあります。実験で扱う器具についての知識を定着させるとともに、学んだことから、自分の考えをもち、実験の前に考察を自分の言葉で表現する力の育成が、これから取り組んでいくべき課題であるといえます。

○無解答率は、全国の 1.44 倍となっています。

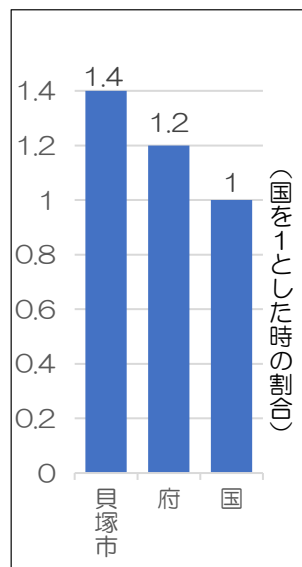
2) 領域・問題別の正答の状況と課題について（中学校）

<国語>

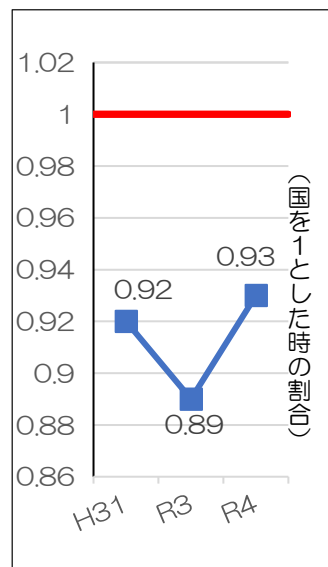
正答数の分布



無解答率の平均



正答率の推移



評価観点・問題形式別正答率（％）

		貝塚市	大阪府	全 国
学習指導要領 の内容	(1)言葉の特徴や使い方に関する事項	67.2	70.7	72.2
	(2)情報の扱い方に関する事項	42.1	43.6	46.5
	(3)我が国の言語文化に関する事項	66.6	69.0	70.2
	A 話すこと・聞くこと	56.7	59.9	63.9
	B 書くこと	42.1	43.6	46.5
	C 読むこと	62.1	66.2	67.9
評価の観点	知識・技能	64.5	67.5	69.0
	思考・判断・表現	56.1	59.3	62.3
問題形式	選択式	69.2	72.1	73.7
	短答式	66.5	69.6	70.3
	記述式	50.0	53.5	57.4

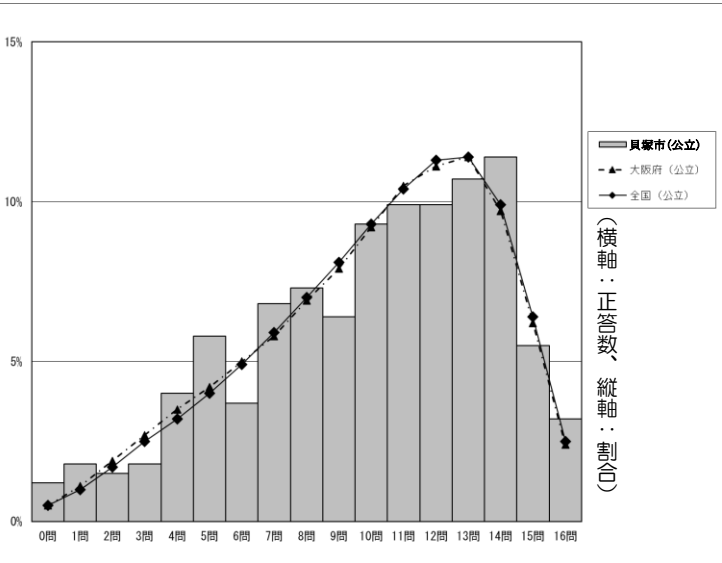
○中学校国語は、正答率が全国平均を5ポイント下回りました。評価の観点全項目で全国平均を下回っていますが、全国正答率を1としたもので経年比較すると、令和3年度から0.04ポイント向上しています。また、平成31年度と比べると0.01ポイント高くなっています。

○知識及び技能の「(3)我が国の言語文化に関する事項」の中で、特に行書についての理解を問う問題の正答率が33.4%と低く、本市の全体的な課題であるといえます。また、思考力・判断力・表現力等において、記述問題の無解答率が約20%となっているものもあり、自分の考えや、読み取ったことを書く力の育成が、これから取り組んでいくべき課題であるともいえます。

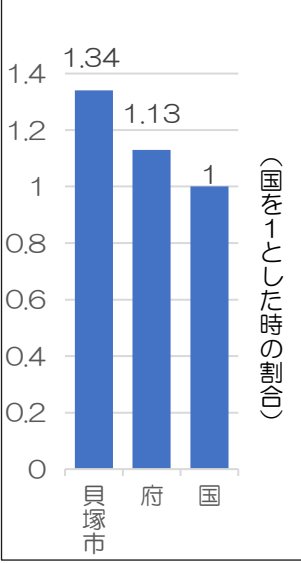
○無解答率は、全国の1.4倍で、いまだ高いのが現状ですが、令和3年度は1.65倍だったことから考えると改善がみられます。

＜数学＞

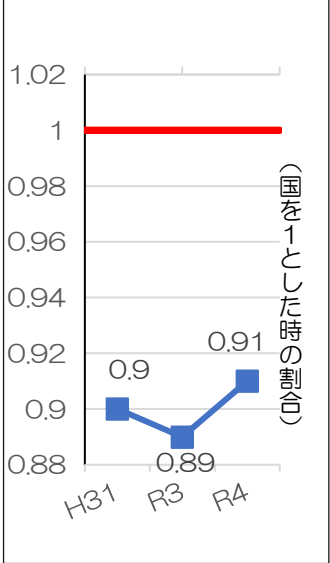
正答数の分布



無解答率の平均



正答率の推移



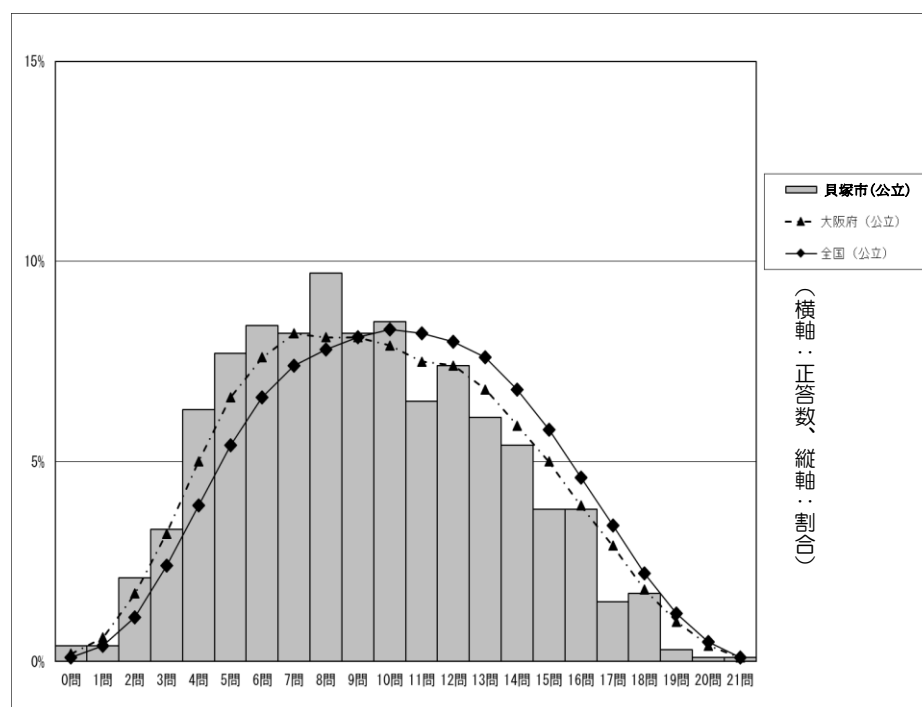
評価観点・問題形式別正答率（％）

		貝塚市	大阪府	全 国
学習指導要領の 領域	A 数と計算	48.6	56.7	57.4
	B 図形	40.3	43.2	43.6
	C 変化と関係	41.4	43.8	43.6
	D データの活用	54.2	55.4	57.1
評価の観点	知識・技能	54.4	59.3	59.9
	思考・判断・表現	32.3	35.4	36.2
問題形式	選択式	49.9	51.4	52.6
	短答式	58.0	65.6	65.7
	記述式	32.3	35.4	36.2

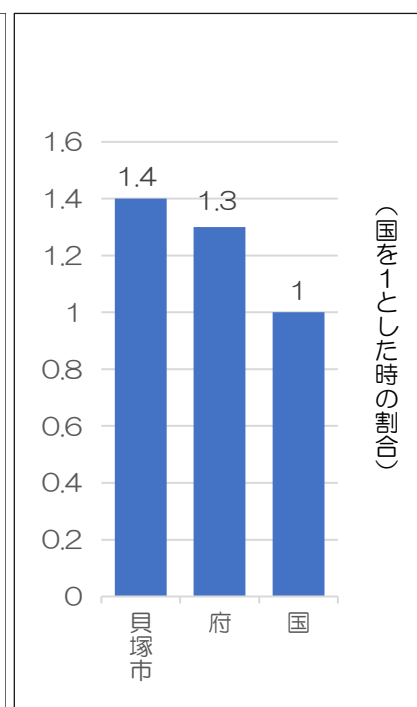
- 中学校数学は、正答率が全国平均を 5.3 ポイント下回りました。評価の観点全項目で全国平均を下回っていますが、全国を 1 としたもので経年比較すると、令和 3 年度から 0.02 ポイント向上しています。
- 関数の問題において、変化の割合は（y の増加量）÷（x の増加量）であるということの理解に課題があります。データの活用では、令和 3 年度から学習することになった箱ひげ図を読み取る力にも課題があることがわかりました。また、図形を用いた証明の問題では、合同である 2 つの図形の対応する角の性質を用いて、筋道を立てて説明する力に大きな課題があります。特に、記述式の問題の無解答率が約 40% となる問題もあり、与えられた図や表などから自分の考えを論理的に表現する力の育成が今後の課題であるといえます。
- 無解答率は、全国の 1.34 倍で、いまだ高いのが現状ですが、令和 3 年度は 1.5 倍だったことから考えると改善がみられます。

<理科>

正答数の分布



無解答率の平均



評価観点・問題形式別正答率（％）

		貝塚市	大阪府	全 国
学習指導要領の 領域	「エネルギー」を柱とする領域	35.1	38.9	41.9
	「粒子」を柱とする領域	47.6	48.7	50.9
	「生命」を柱とする領域	50.0	53.2	57.9
	「地球」を柱とする領域	40.9	42.8	44.3
評価の観点	知識・技能	40.5	44.1	46.1
	思考・判断・表現	45.6	47.8	51.0
問題形式	選択式	45.3	47.6	49.6
	短答式	21.4	22.0	24.8
	記述式	44.4	48.3	53.5

○中学校理科は、正答率が全国平均を 5.3 ポイント下回りました。評価の観点の全項目で全国平均を下回っています。

○力の働きに関する知識及び技能を活用し、物体にはたらく重力と釣り合う力を矢印で表し、その力を説明できるかという設問に対する正答率が 8.4%でした。また、考察の妥当性を高めるために実験の計画を検討し、改善するための方法について記述する設問の正答率は 33%で、無解答率は 41.4%でした。このことから、「エネルギー」に関する知識及び技能を元にして、考察を自分の言葉で表現する力の育成が、これから取り組んでいくべき課題であるといえます。

○無解答率は、全国の 1.4 倍となっています。

3. 基本的な生活習慣等について（児童生徒質問紙調査より）

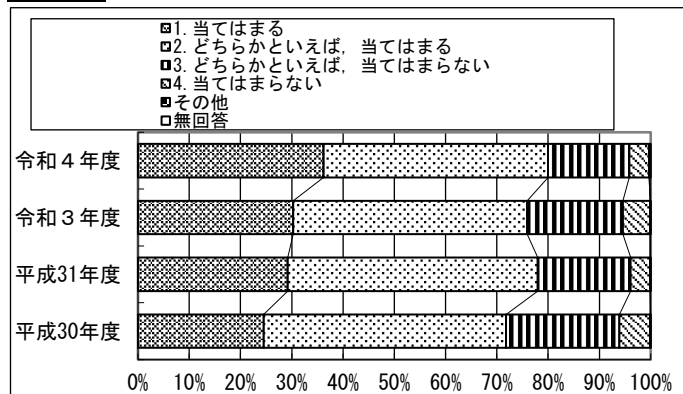
1) 授業に関すること

児童生徒質問紙調査の経年比較と今年度の児童生徒と学力の相関関係について分析しました。

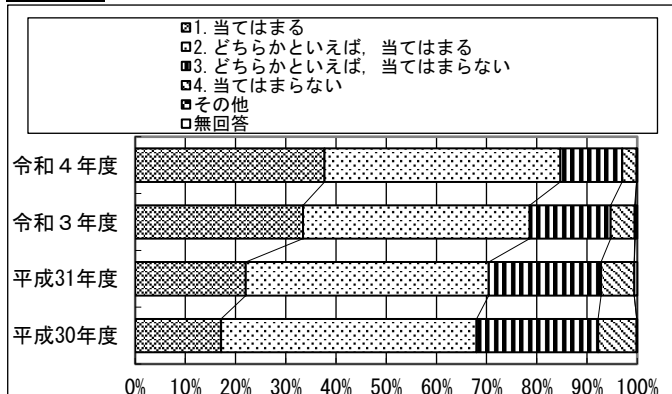
※以下の全ての項目について、（ ）の中は、中学校についてのものです。

1－（1）5年生（1、2年生の時）までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。

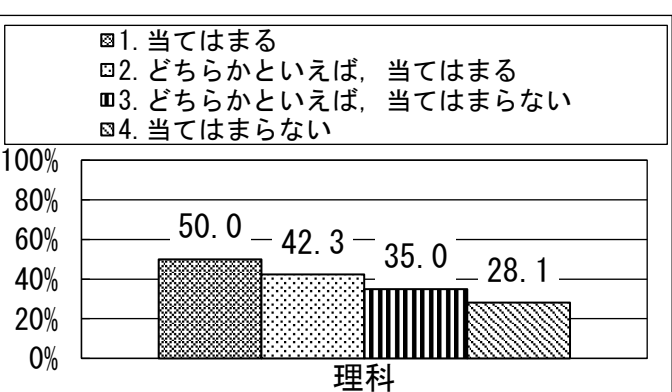
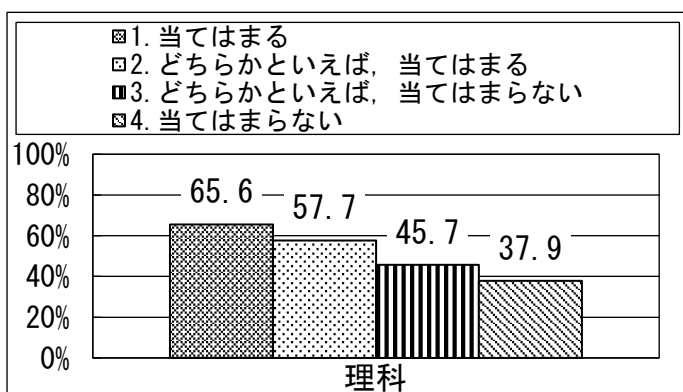
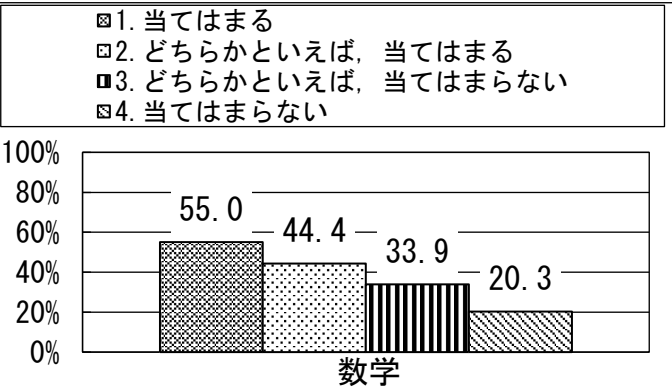
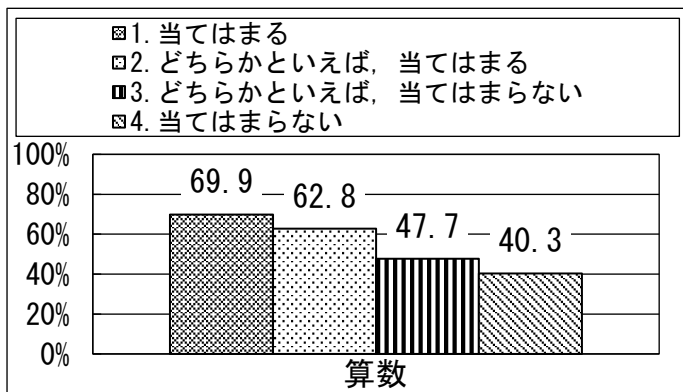
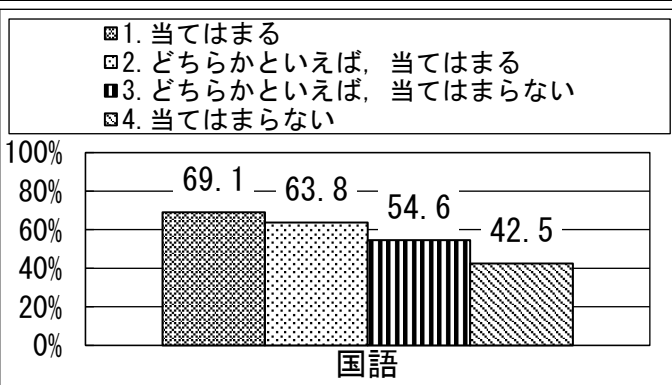
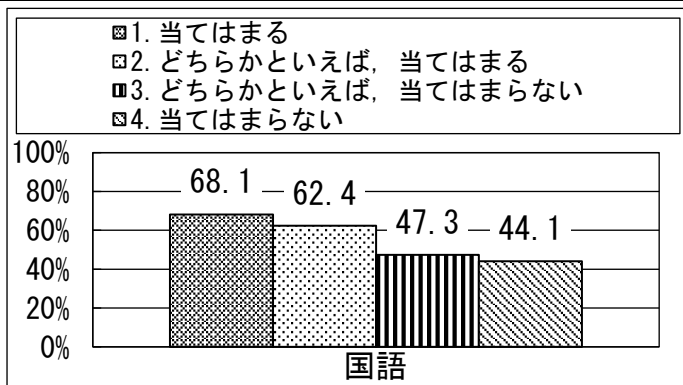
小学校



中学校

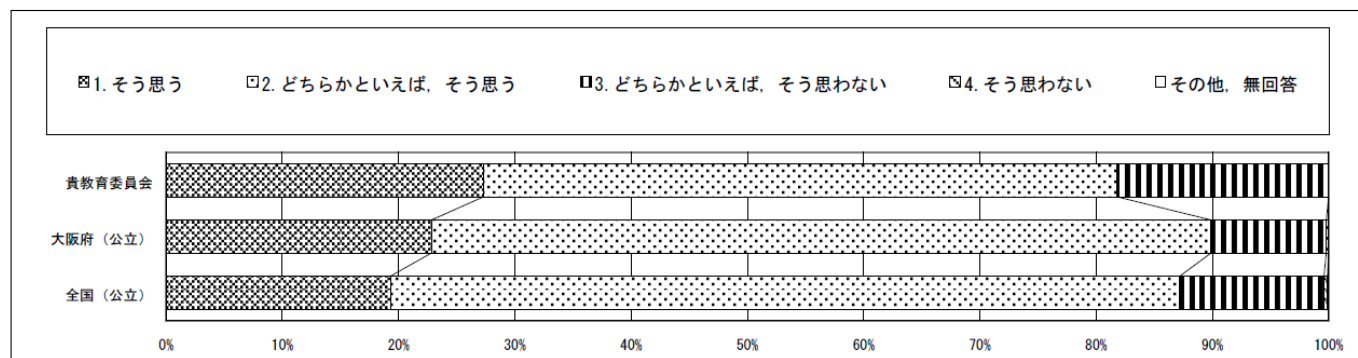


回答した選択肢別の平均正答率



(学校質問紙の結果-小学校)

質問番号	質問事項										
(23)	調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか										
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他、無回答
貝塚市	27.3	54.5	18.2	0.0							0.0
大阪府（公立）	22.8	67.0	9.9	0.2							0.0
全国（公立）	19.3	67.9	12.4	0.3							0.1



1ー(1)の質問項目のグラフは、「これまでに受けた授業で、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を比較したものです。

平成30年から経年比較すると、「当てはまる」という肯定的回答が小学校、中学校ともに、年々向上しており、令和4年度は「どちらかといえば、当てはまる」を含めた肯定的回答が80%を超えています。

また、この質問について、それぞれの選択肢を選んだ児童・生徒の平均正答率を比較したグラフ（以後、クロス集計グラフと記述する）からは、小中学校ともに、非常に強い相関関係があることがわかります。

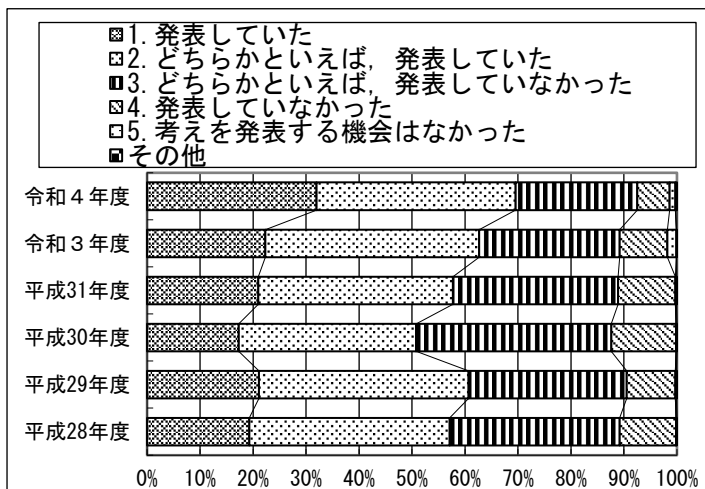
小学校の3教科、中学校の国語と理科では、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率より約20ポイント以上差があり、中学校数学では約30ポイントの差が出ています。

学校質問紙の結果において、本市の結果は、「そう思う」という強い肯定的回答が全国よりも8ポイント上回っており、学校も児童に対して自ら考える力の育成を意識して取り組んでいることがわかります。しかし、「どちらかといえば、そう思う」を含めた肯定的回答で比べると、全国よりも5.4ポイント下回るため、今後も主体的に学習に取り組む態度を育成するために授業改善を進めていく必要があります。

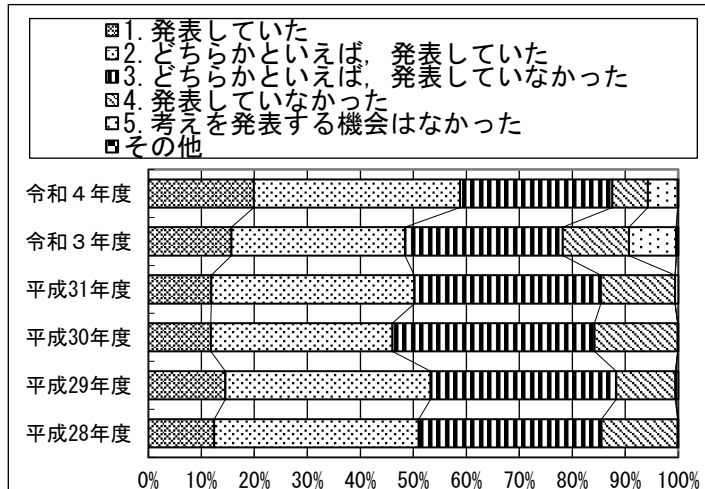
今後は、子どもたちが見通しをもって主体的に学習に取り組めるよう、どの教科においても、まずは一斉学習で考える根拠を身につけ、それをもとに自分で考える時間をもつ。その上で、友だちとの学び合い活動を多く取り入れたり、iPadを活用したりしながら、考えを説明する時間を大切にした授業改善を行うことが必要であり、子どもたちが、自らの理解度を実感し「できた。わかった」と感じるができる、ふりかえり場面のある授業を行っていきたいと考えています。

1－(2) 5年生（1、2年生の時）までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか。

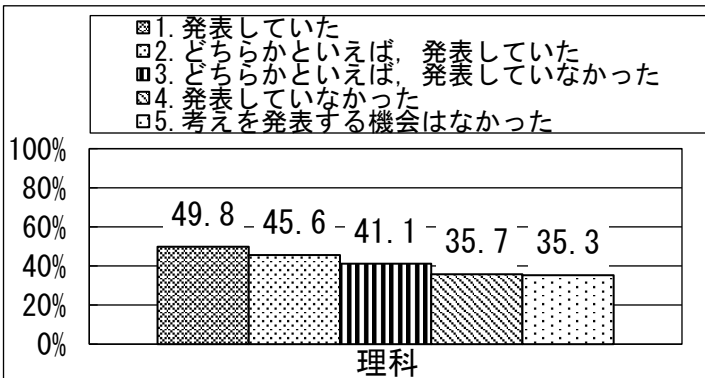
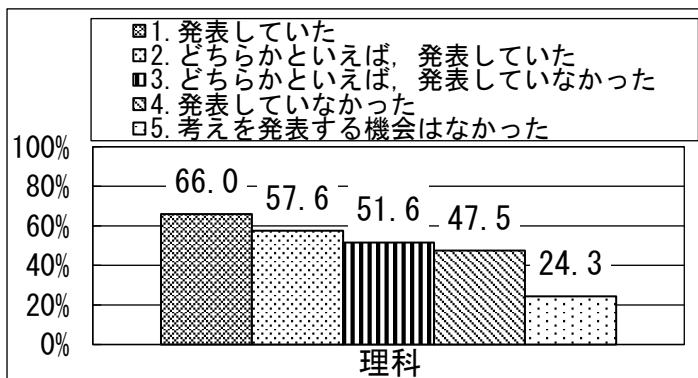
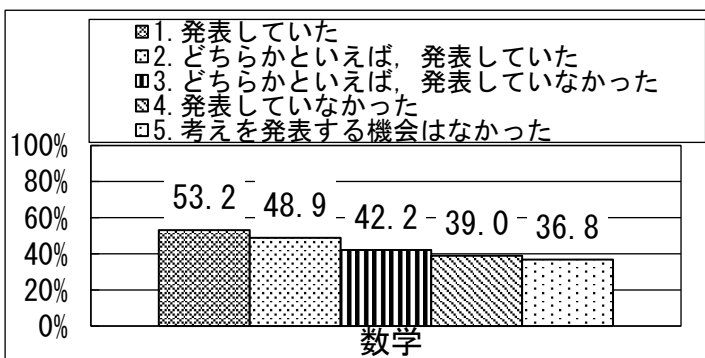
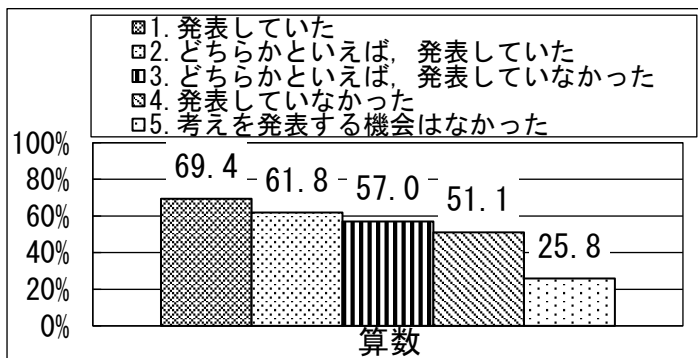
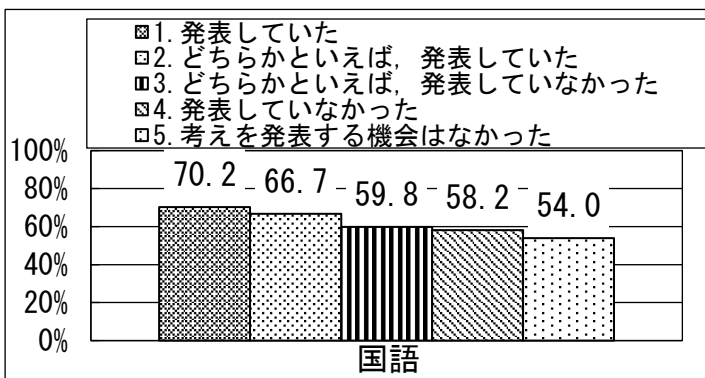
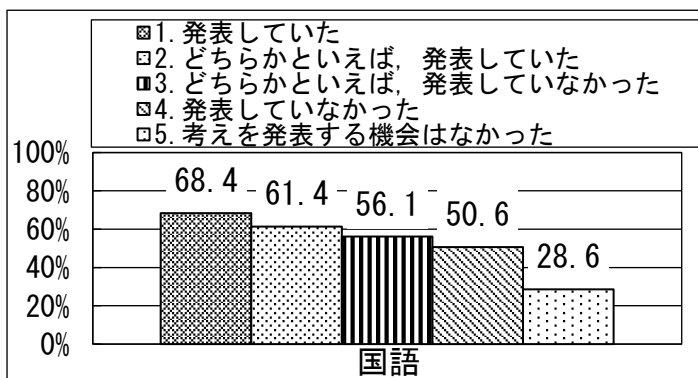
小学校



中学校

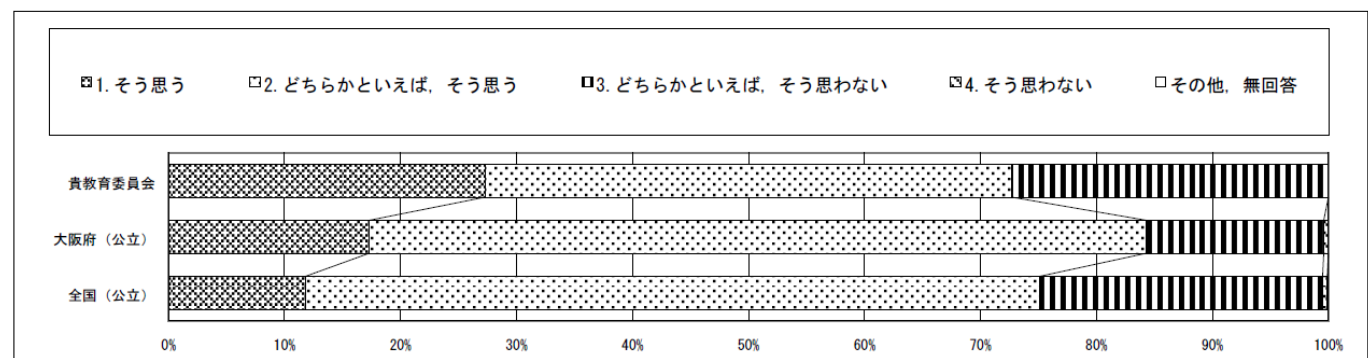


回答した選択肢別の平均正答率



(学校質問紙の結果-小学校)

質問番号	質問事項										
(24)	調査対象学年の児童は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか										
選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	その他、無回答
貝塚市	27.3	45.5	27.3	0.0							0.0
大阪府(公立)	17.3	67.0	15.3	0.4							0.0
全国(公立)	11.8	63.3	24.4	0.4							0.1



1ー(2)の質問項目のグラフは、「これまでに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか。」という問いに回答した児童生徒の割合を比較したものです。

平成30年から経年比較すると、「当てはまる」という強い肯定的回答が小学校、中学校ともに、年々向上しており、令和4年度は「どちらかといえば、当てはまる」を含めた肯定的回答が小学校では約70%、中学校では約60%となっています。

また、この質問について、クロス集計グラフからは、小中学校ともに、非常に強い相関関係があることがわかります。

小学校の3教科では、「発表していた」と回答した児童の平均正答率が「発表していなかった」と回答した児童生徒の平均正答率より約20ポイント以上差があり、中学校の3教科では約15ポイントの差が出ています。

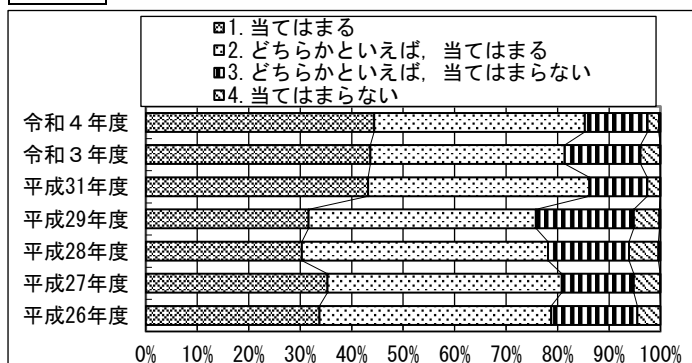
学校質問紙の結果において、本市の結果は「そう思う」という強い肯定的回答が全国よりも約16ポイント上回っており、学校も児童が発表の時に資料や文章、話の組立てを工夫できていると感じていることがわかります。

今後も、児童生徒が学習したことを単に「知っている」だけの知識として蓄積させるのではなく、それを他者に伝える力を育成する必要があると考えています。そのために、知識や技能を取り入れることで終わるのではなく、それら学んだことを活かして、児童生徒が考えたり、表現したりする機会を多くもつことができる授業を行う必要があります。また、学んだことを、生活にどう活かすことができるのかということを考えられる力の育成をめざしていきたいと考えています。

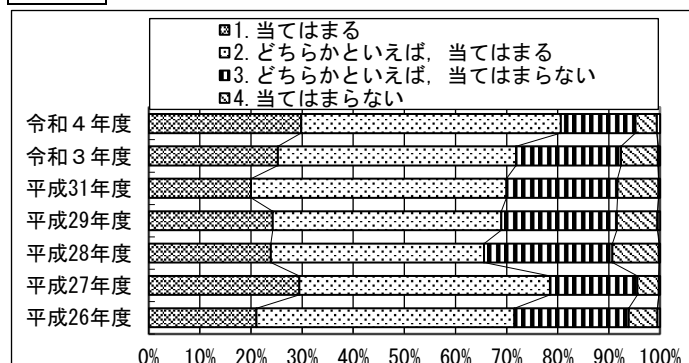
自分の考えを相手にわかりやすく伝える力を育成するためには、国語だけでなく、教科の枠をこえて資料の収集や選択、話す内容、構成を意識した教科横断的な学びが重要であると考えています。

1ー（3）国語の授業の内容はよくわかりますか。

小学校

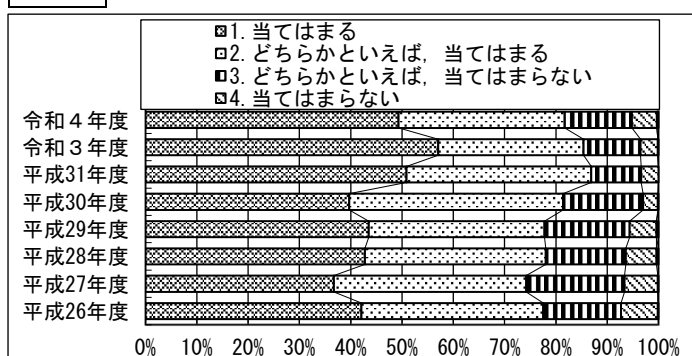


中学校

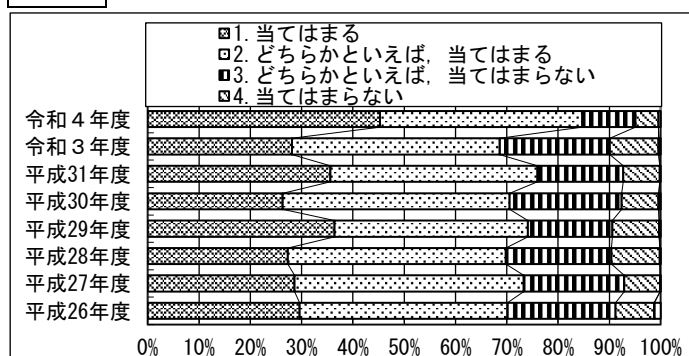


1ー（4）算数（数学）の授業の内容はよくわかりますか。

小学校

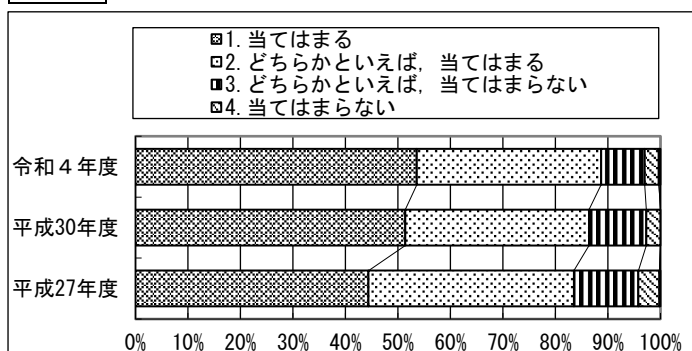


中学校

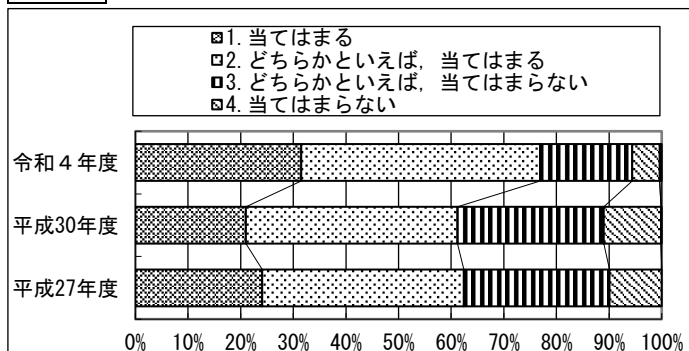


1ー（5）理科の授業の内容はよくわかりますか。

小学校



中学校



1ー（3）（4）（5）の質問項目のグラフは、国語、算数（数学）、理科において「授業の内容はよくわかりますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を表したものです。

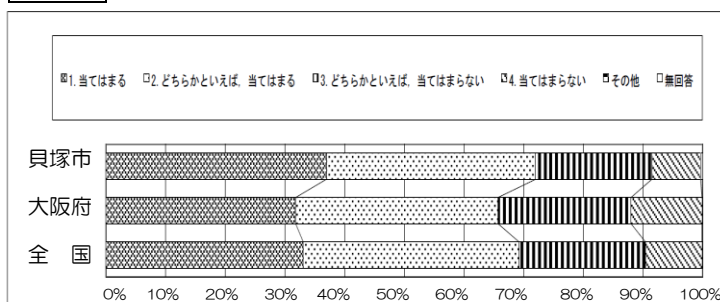
小学校の算数についての回答は、令和3年度から比べて肯定的回答が3.5ポイント減少しました。しかし、それ以外の小中学校の国語、中学校の数学において「授業の内容がよくわかる」と肯定的に回答した割合が令和3年度から増加しています。また、小中学校の理科においても平成30年度から増加しています。

小中学校では、どの教科においても、「何を理解しているか・何ができるか。」「理解していること・できることをどう使うか。」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか。」の3つの柱を大切にして、授業改善を進めています。その取り組みが授業のわかりやすさにつながっていることがわかります。

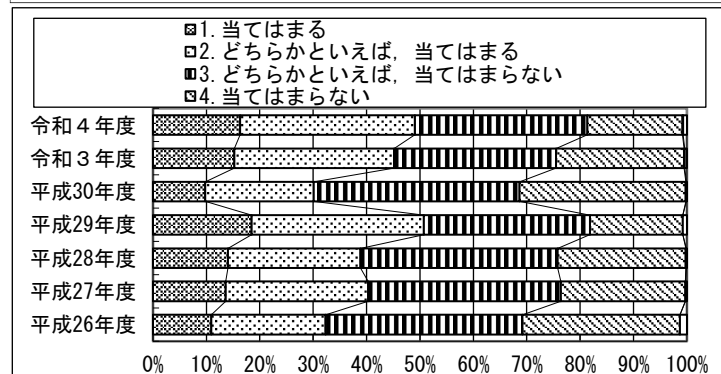
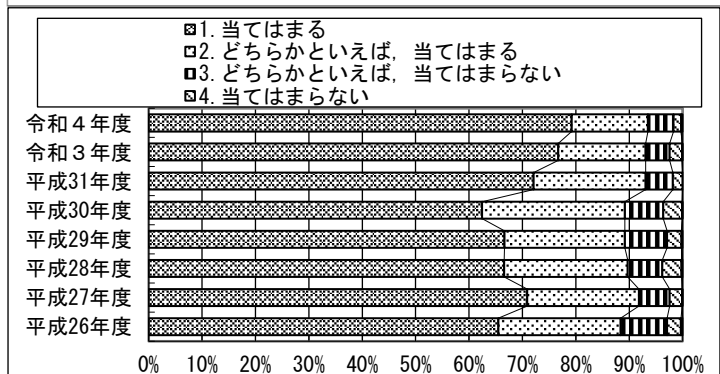
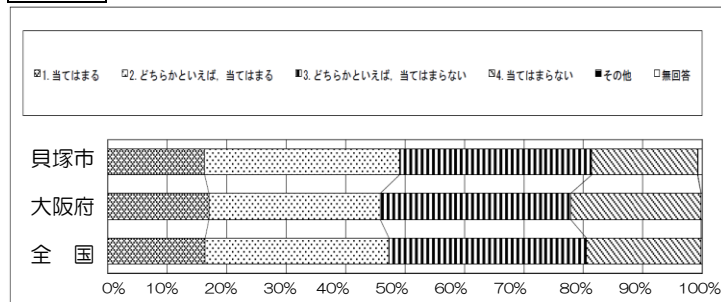
今後も、児童生徒が「わかった」と思えるような授業づくりを進めていきます。

1ー(6) 算数(数学)で学習したことを、普段の生活の中で活用できないかを考えますか。

小学校

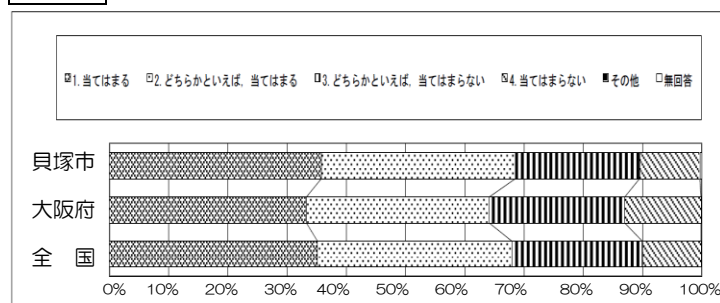


中学校

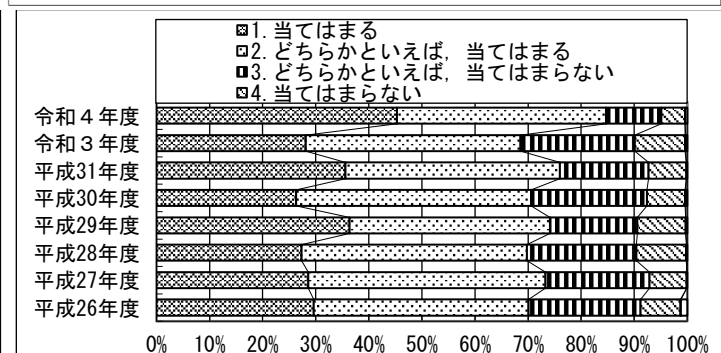
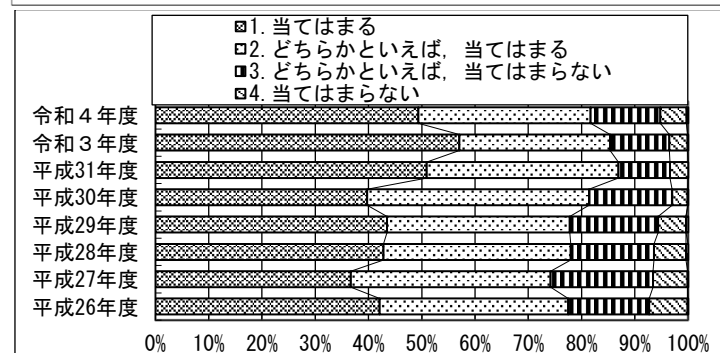
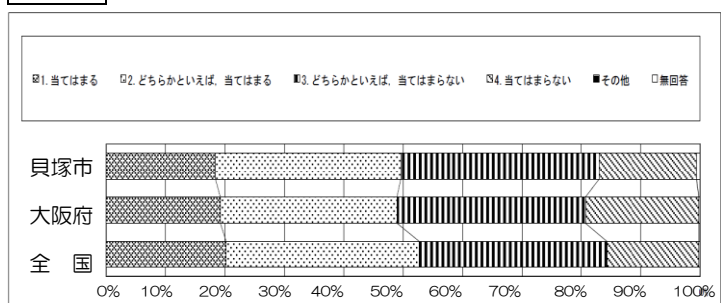


1ー(7) 理科で学習したことを、普段の生活の中で活用できないかを考えますか。

小学校



中学校



1ー(6)(7)の質問項目のグラフは、算数(数学)、理科において「普段の生活の中で活用できないかを考えますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を表したものです。

算数、数学では肯定的回答が全国平均を上回っています。理科では小中学校ともに全国平均を下回っています。しかし、経年比較すると、小学校の理科以外は令和3年度から肯定的回答は増加しています。

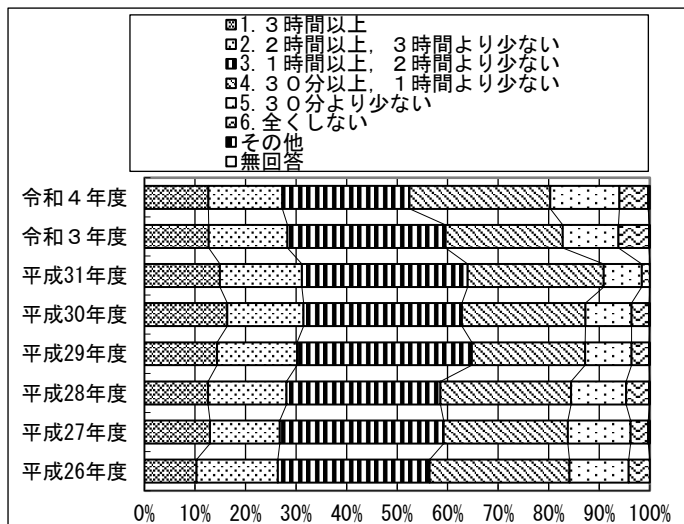
本市では学力向上の柱の一つを「生きて働く力の育成」としています。学んだ知識や技能を生活にどう生かしていくかを考える力が重要であると考えています。

今後もこの力の育成に向けて、授業改善を進めていきます。

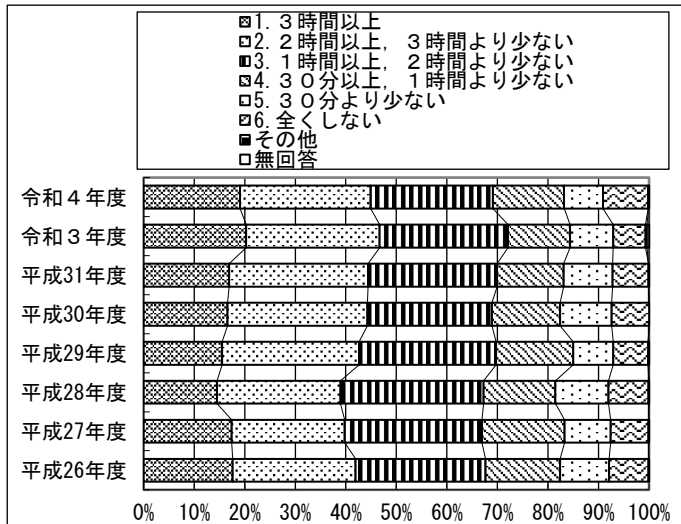
2) 家庭学習に関すること

2- (1) 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）

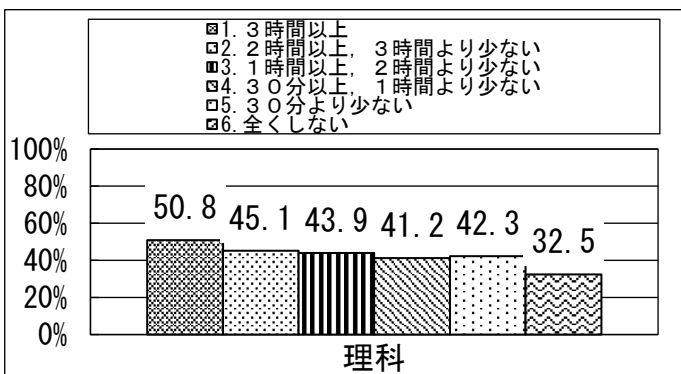
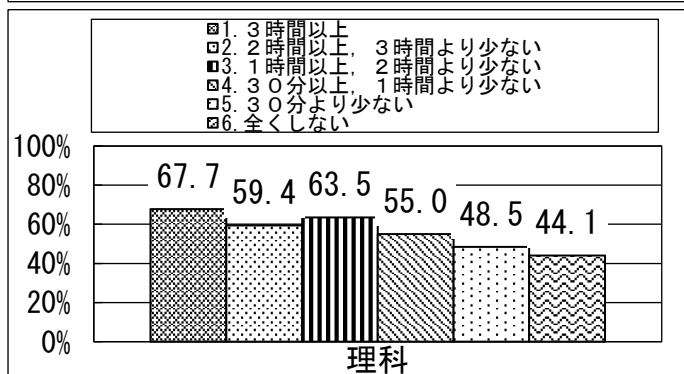
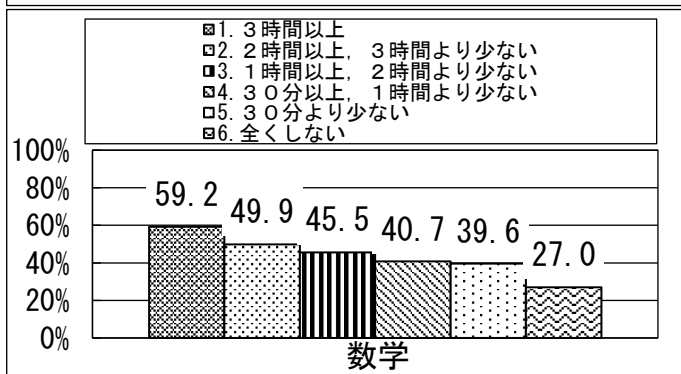
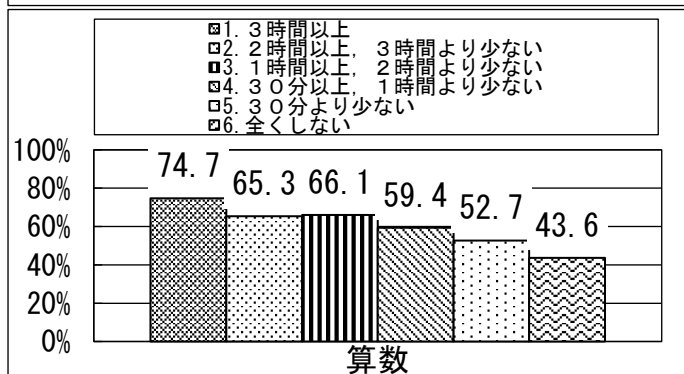
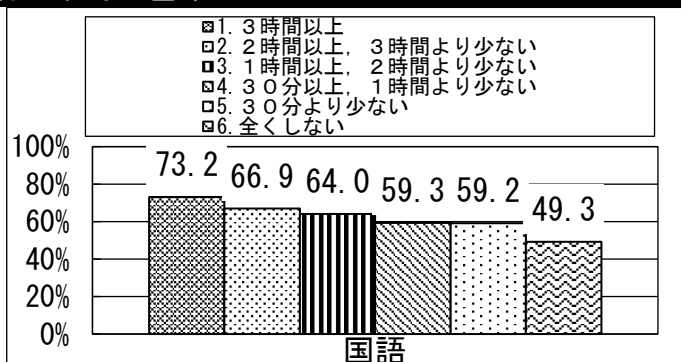
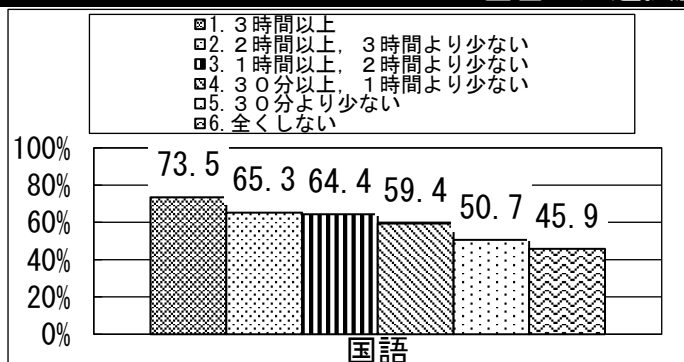
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



2-（1）の質問項目のグラフは、「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

1時間以上家庭学習をしている割合は、全国と比べると、小学校では6.9ポイント低くなっていて、中学校では同じくらいの割合となっています。3時間以上の家庭学習をしている割合を比べると、小学校、中学校ともに全国の割合を上回っていて、中学校でも10ポイント近く上回っています。

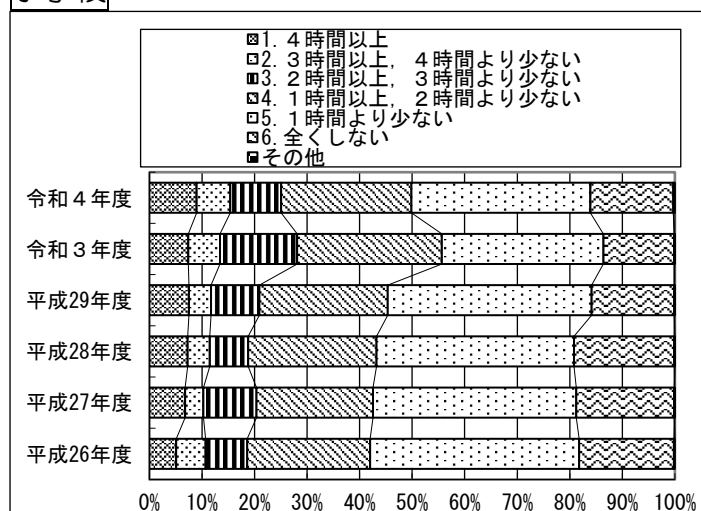
また、この質問について経年比較すると、1時間以上家庭学習をしている割合が、小学校では平成31年度から減少傾向となっていて、中学校では令和3年度から減少しました。

この質問について、クロス集計グラフからは、小中学校ともに、特に強い相関関係が見られます。小学校、中学校の全教科において、「3時間以上」と回答した児童の平均正答率が「全くしない」と回答した児童生徒の平均正答率より約30ポイント高くなっており、小学校、中学校ともに家庭学習は重要な役割があると考えられます。

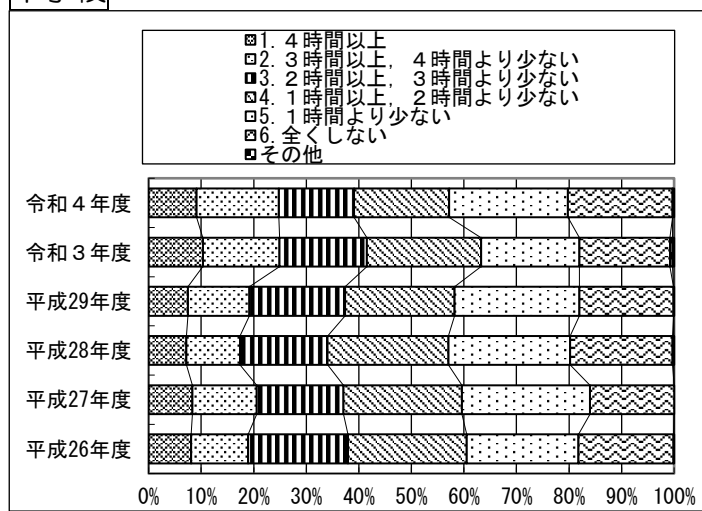
＜関連した質問＞

土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）

小学校



中学校

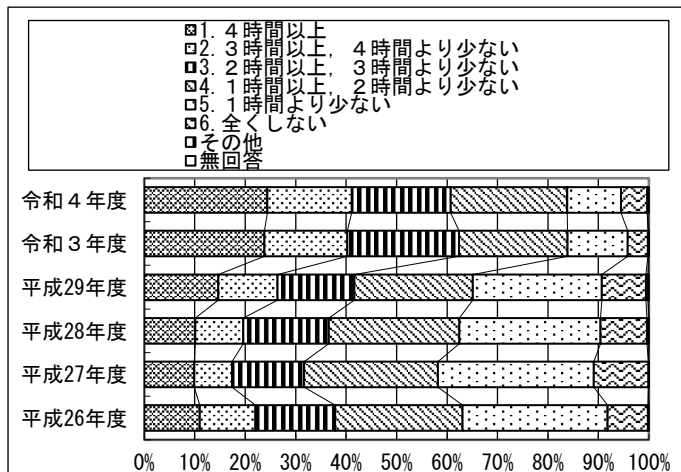


関連する質問において、土曜日や日曜日の家庭学習の時間の経年比較をすると、小学校では3時間以上学習する割合が平成27年度以降増加しています。また中学校でも平成29年度以降増加しています。このことから、小学校では平日の家庭学習より、休日に家庭学習をする傾向があることがわかります。

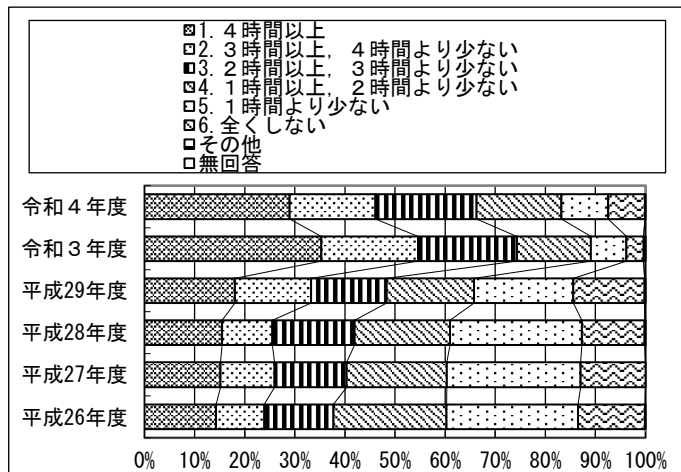
小学校段階においては、宿題や自主学習等により、学び方や基礎基本を身につけたり、学習への意欲を向上させたりすることが大切であると考えています。また、中学校では、生徒一人ひとりが自分にとって最適な学習のしかたを身につけ、それを習慣化させることが大切であると考えています。

2- (2) 普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をしますか。

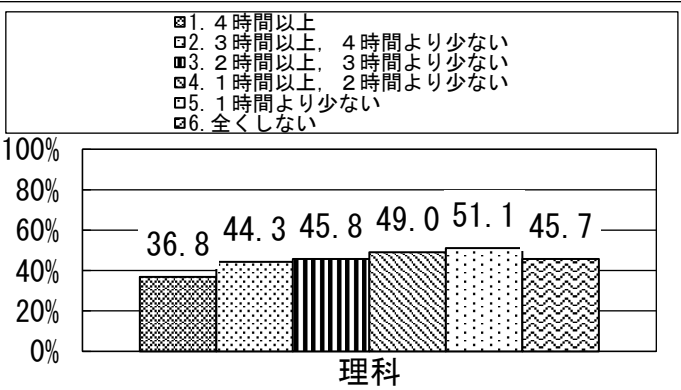
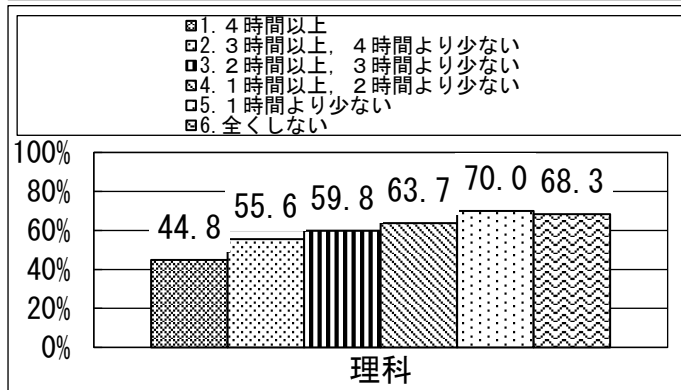
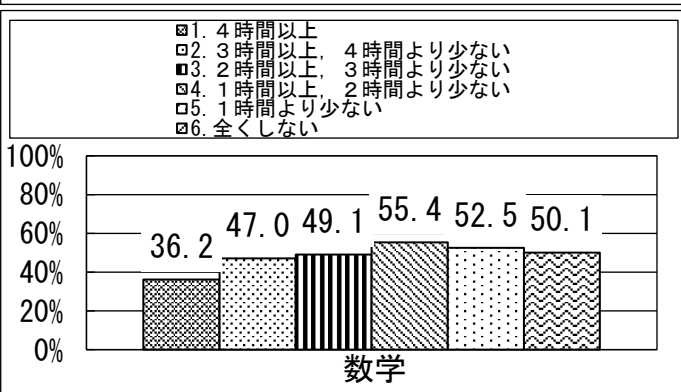
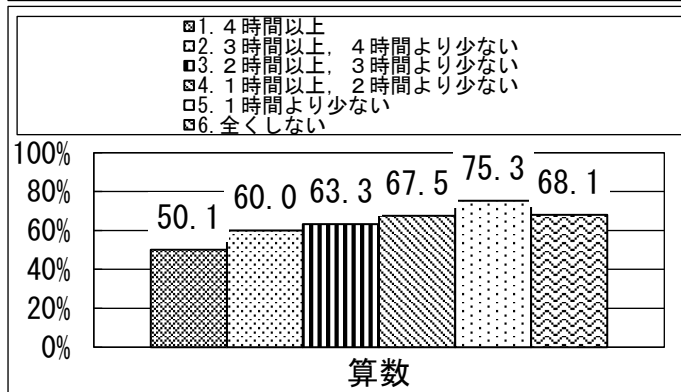
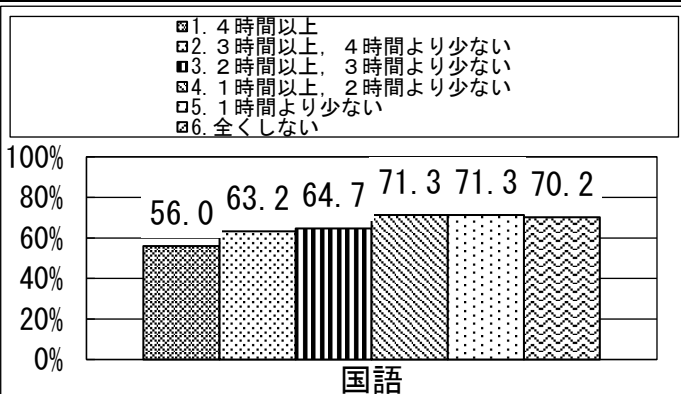
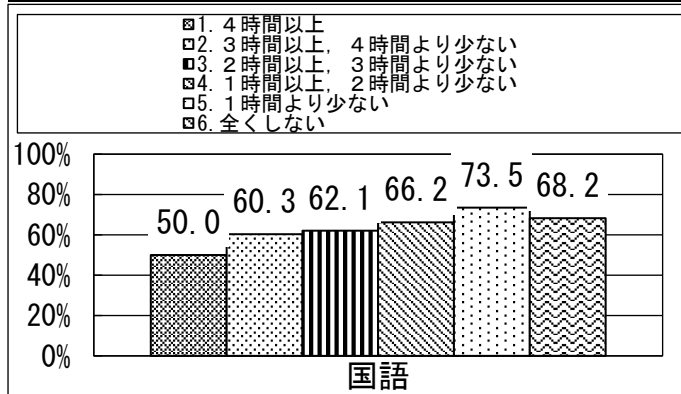
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



2-（2）の質問項目のグラフは、「普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をしますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

小学校では、60%以上の児童が「2時間以上」と回答しており、中学校でも、66%以上の生徒が「2時間以上」と回答しています。

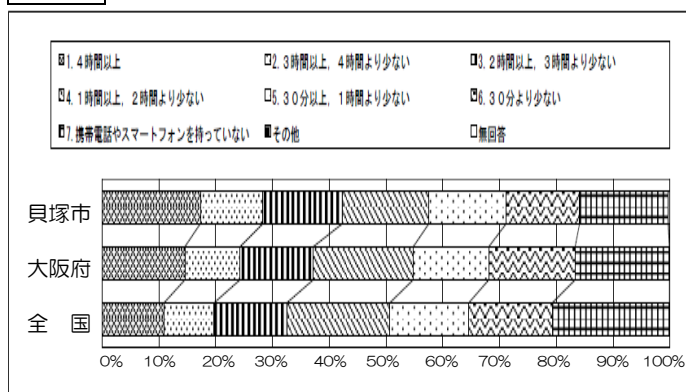
経年比較すると、小中学校ともに平成29年度から令和3年度で「2時間以上」と回答している児童生徒が一気に増加しましたが、令和3年度から令和4年度では、どちらも減少していることがわかります。

また、この質問について、クロス集計グラフからも、小中学校ともに、強い相関があることがわかります。テレビゲームをする時間が増えることで、学習意欲が低下したり、学習時間が少なくなったりすることが正答率にも影響が出ているのではないのでしょうか。

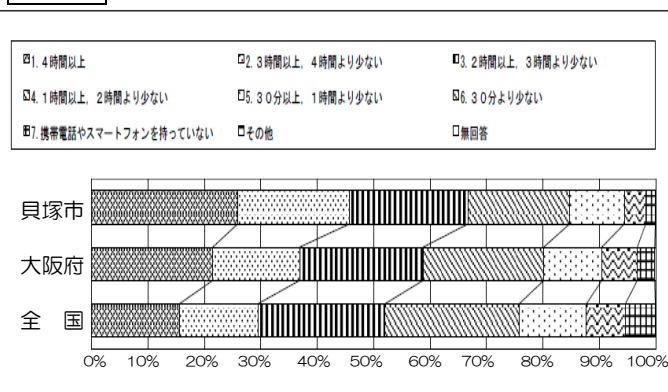
＜関連した質問＞

普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンでSNSや動画視聴などをしますか（携帯電話やスマートフォンを使って学習する時間やゲームをする時間は除く）

小学校



中学校



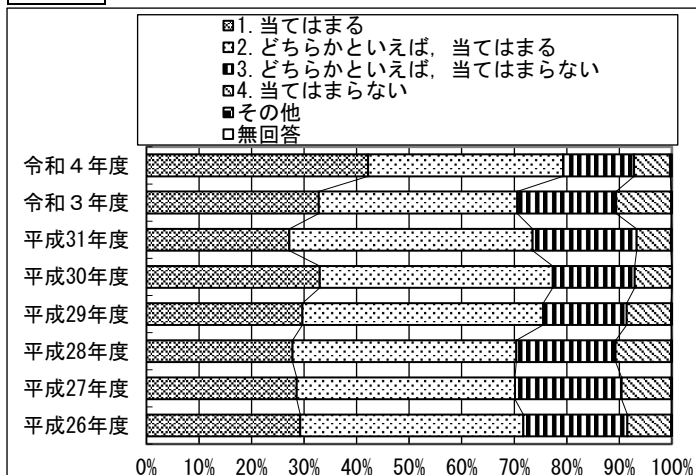
上のグラフは、「普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンでSNSや動画視聴などをしますか」という問いに回答した児童生徒の割合を全国、大阪府の結果と比較したものです。このグラフから本市の児童生徒は、全国、大阪府と比べて、携帯電話やスマートフォンでSNSや動画視聴などを行っている時間が長いということがわかります。

学校でも、児童生徒がデジタルのよりよい利用者となれるように、適切に情報テクノロジーを活用するための規範や原則について継続的に指導していきます。また、デジタル社会にあふれる情報の中から必要な情報を選び、それを適切に活用することのできる力の育成にも取り組んでまいります。

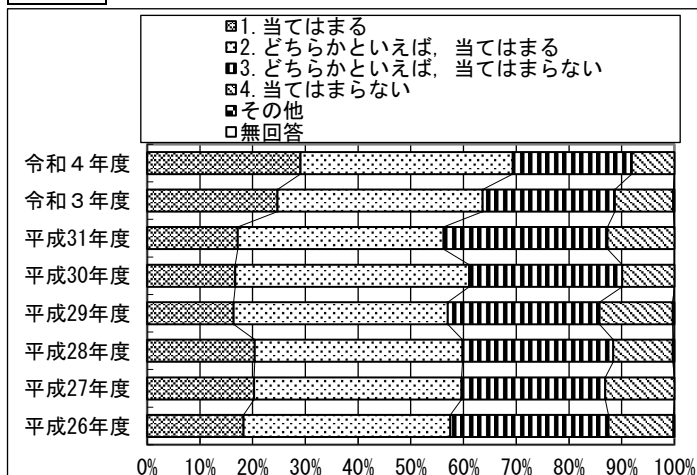
3) 規範意識、自己肯定感等に関すること

3-(1) 自分には、よいところがあると思いますか。

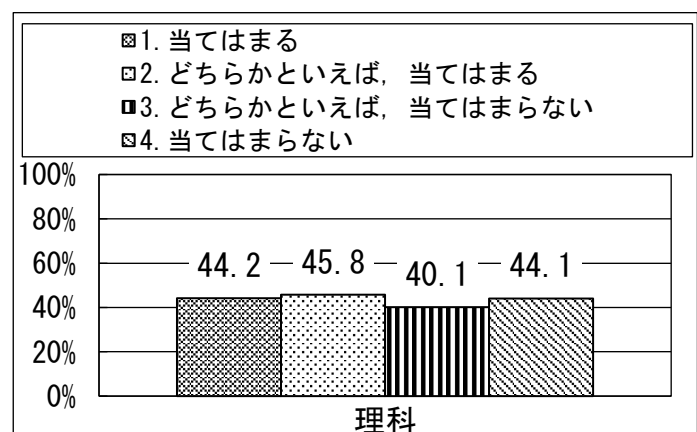
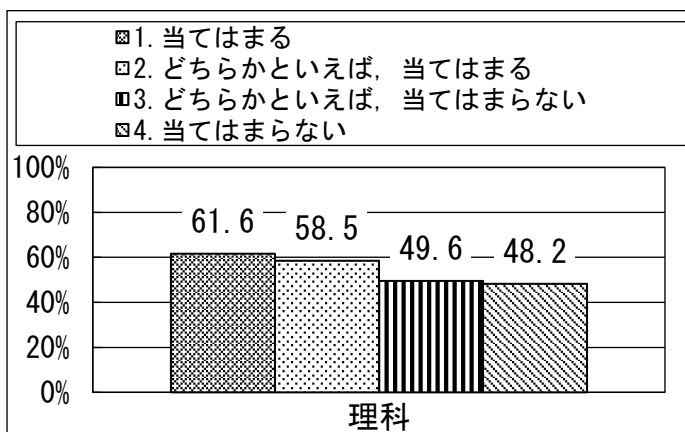
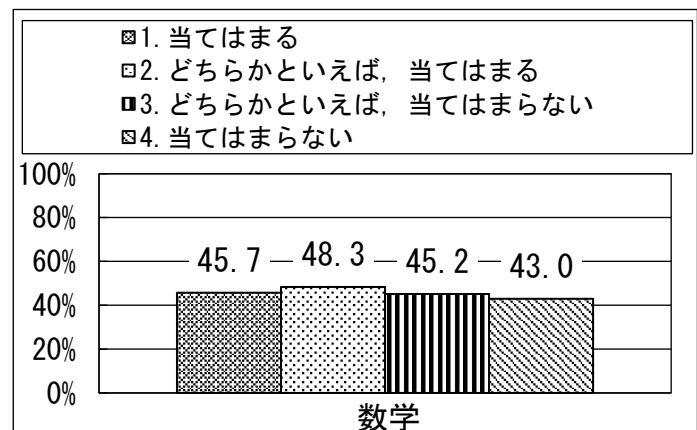
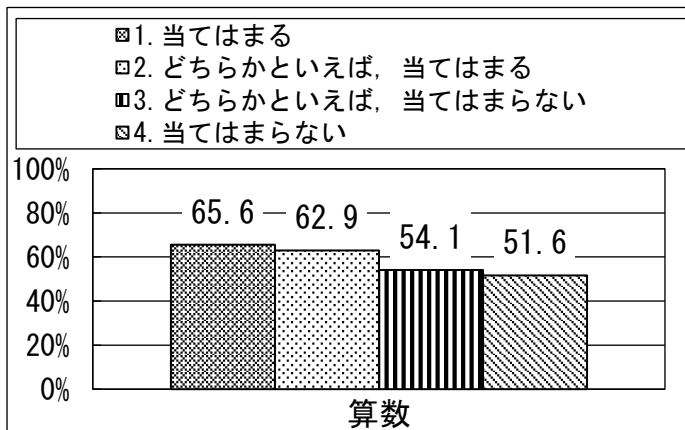
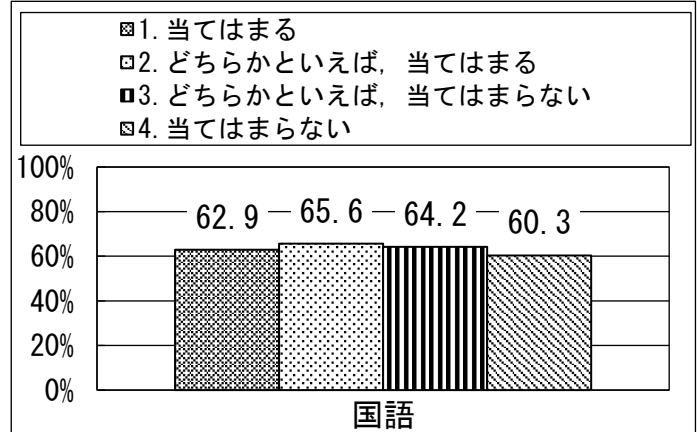
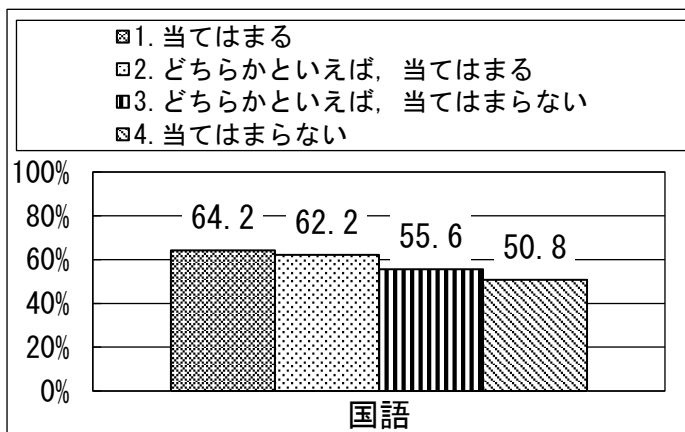
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



3ー（１）の質問項目のグラフは、「自分には、よいところがあると思いますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

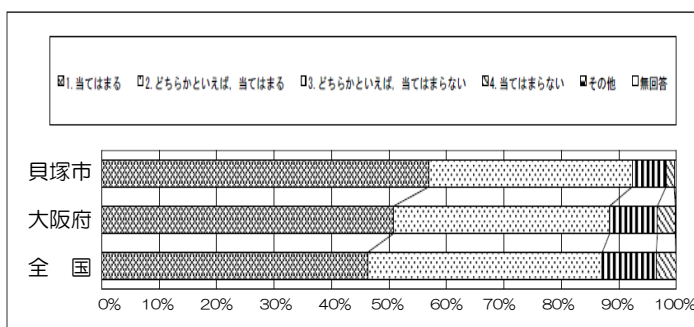
小学校においては、平成30年度から平成31年度にかけて肯定的回答が減少傾向となっておりましたが、令和3年度、令和4年度と小中学校とも増加しています。小学校では約80%、中学校では約70%の児童生徒が「自分には、よいところがある」と高い自己肯定感を感じていることがわかります。

この質問のクロス集計グラフから、小学校の全教科において高い相関関係を示しており、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率より10ポイントから15ポイント高くなっており、小学校段階では自己肯定感の高さが、正答率につながっていることがわかります。しかし、中学校の全教科では相関関係はないようです。

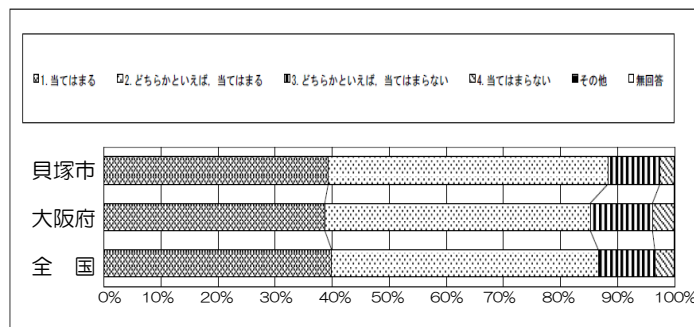
＜関連した質問＞

先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。

小学校



中学校



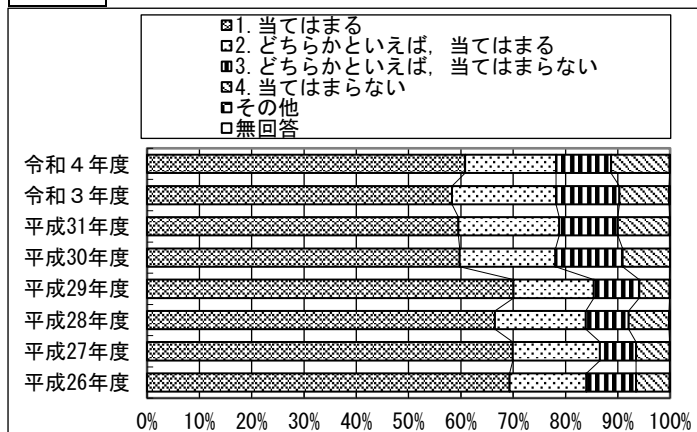
上のグラフは「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という問いに回答した児童生徒の割合を全国、大阪府の結果と比較したものです。全国と比べて、小学校は5.3ポイント、中学校は1.7ポイント高い結果となりました。小学校、中学校ともに約90%の児童生徒が肯定的に回答しており、先生の声掛けや、評価が子どもたちに伝わっていることがわかります。

本市では、幼稚園、小学校、中学校の12年間を通じて、数値で表すことのできない「非認知能力（未来へ向かう力）」を育み、大切にすることを目標としています。そのために園児・児童・生徒の「思い」を大切に、不適切な行動や言動等に対して、一方的にしかるのではなく、「何をしたかったのか」、「次はどうすればみんなが気持ちよく過ごせるのか」等を聞き取りながら指導することに努めています。

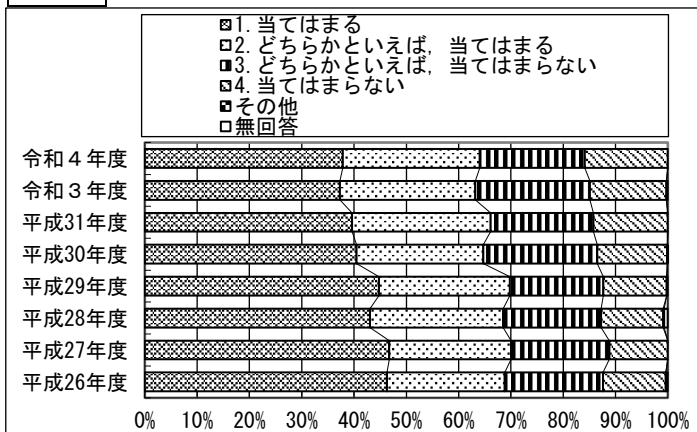
また、子ども一人ひとりが活躍できる場をたくさん設定しています。子どもたち同士がその体験の中から、互いに協力したり、乗り越えたりすることを通して、様々な学びにつなげています。そして、結果だけでなくその過程を認めることも大切にしています。ご家庭でも「上手くできる」だけでなく、「精一杯取り組む」ことや「自ら行動しようとする気持ち」を肯定し、認める声かけをお願いします。

3－（２）将来の夢や目標を持っていますか。

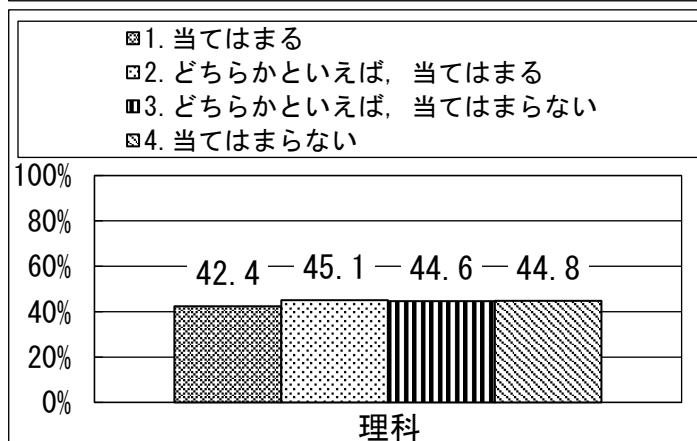
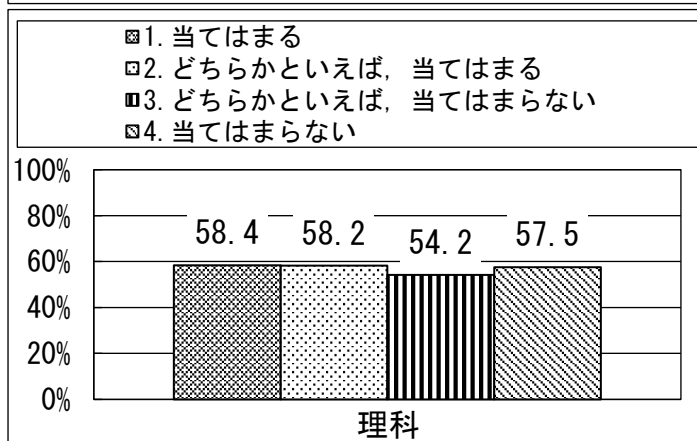
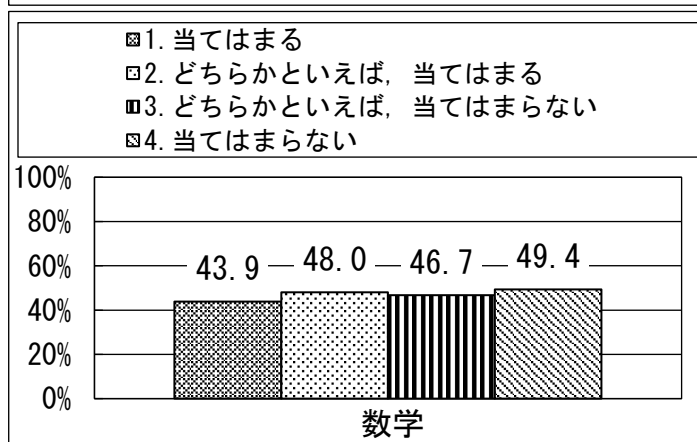
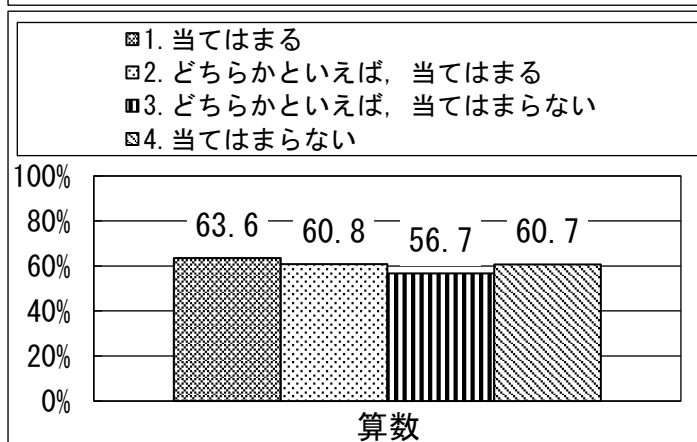
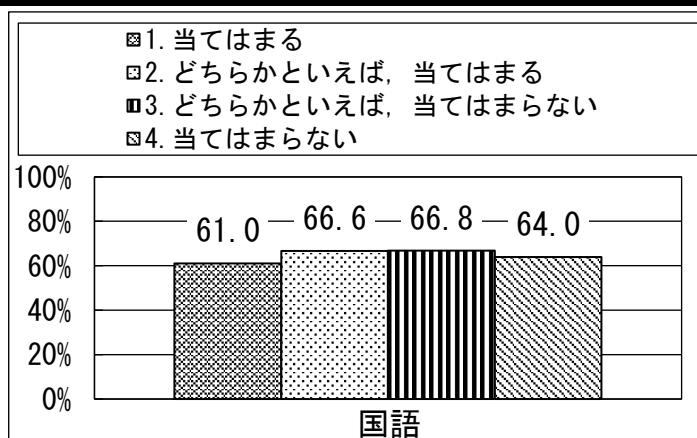
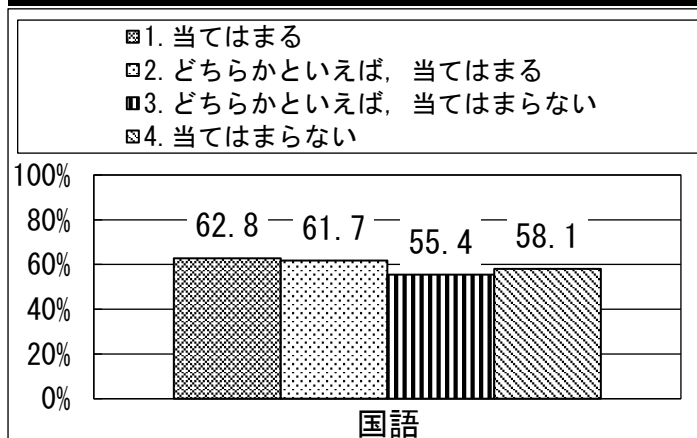
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



3ー(2)の質問項目のグラフは、「将来の夢や目標を持っていますか」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

小学校、中学校ともに、平成30年度から令和3年度にかけて減少傾向となっておりましたが、令和4年度は小学校で2.5ポイント、中学校で0.6ポイント「当てはまる」と回答した割合が増加しました。

また、この質問についてのクロス集計グラフから、中学校では相関関係があるとはいえません。しかし、小学校の国語と算数において、相関関係を示しており、「当てはまる」と回答した児童の平均正答率が「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率より約4ポイント高くなっています。

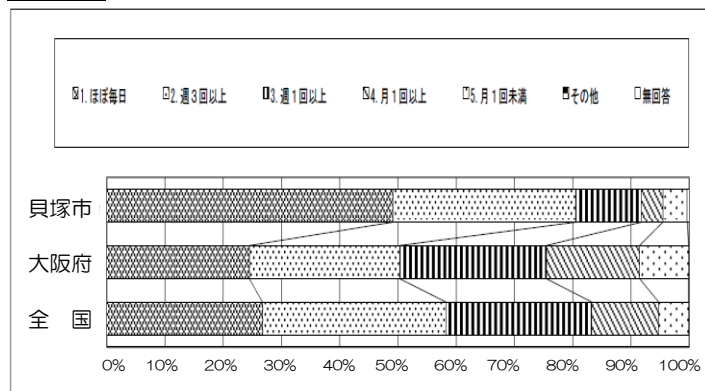
貝塚市では、身近な自然や歴史、文化にふれることや、地域での体験活動などを通して、「夢」をもち、たくましく生き、貝塚で学んだことを「誇」らしく語ることでできる子どもたちを育てることを目的に、「貝塚学」を学んでいます。

当然、成長するにしたがって、夢が変わったり、目標が変更になったりすることはあると思います。その時々で変わったとしても、それを支える環境が大切です。児童生徒が将来への夢をもつことができるよう、貝塚学を大切にするとともに、より一層キャリア教育を進めていきたいと考えています。

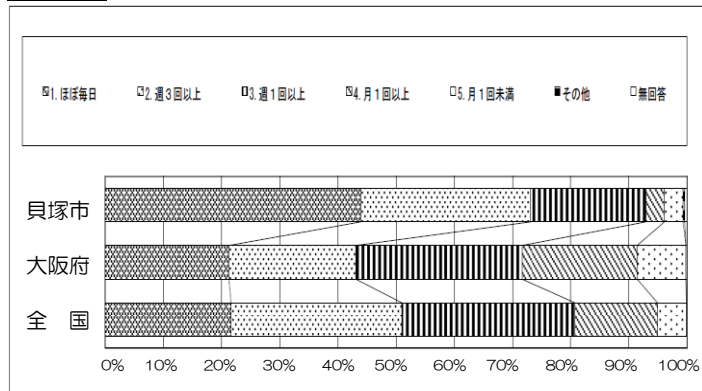
4) ICTの活用に関すること

4ー(1) 5年生(1、2年生)までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。

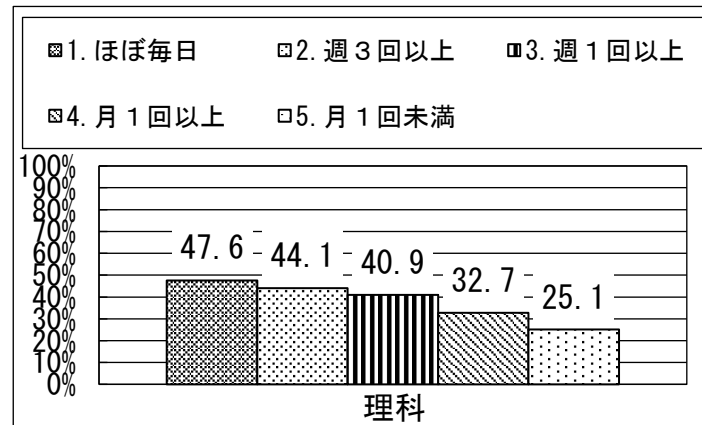
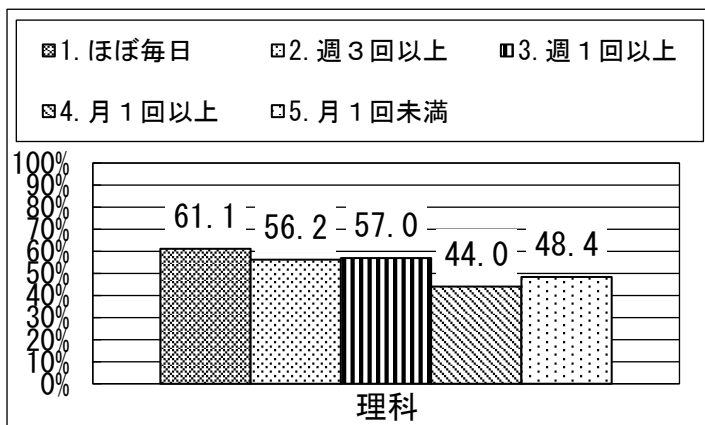
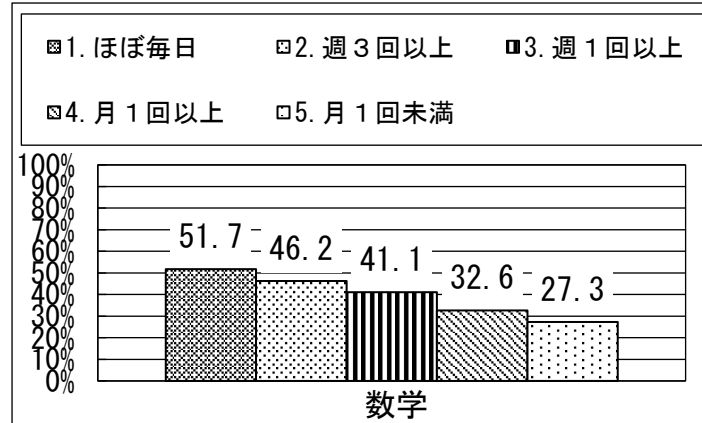
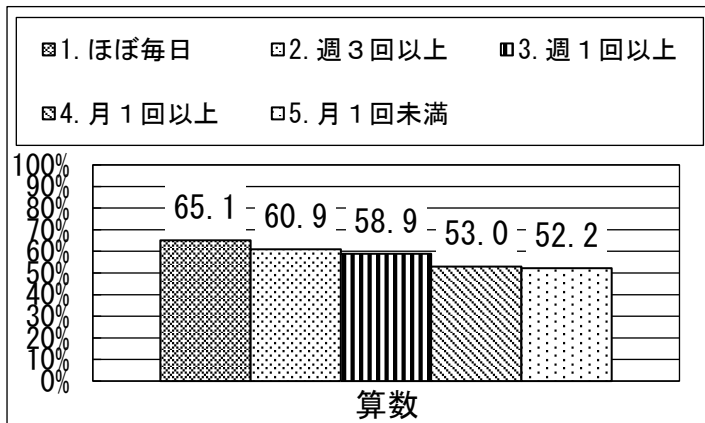
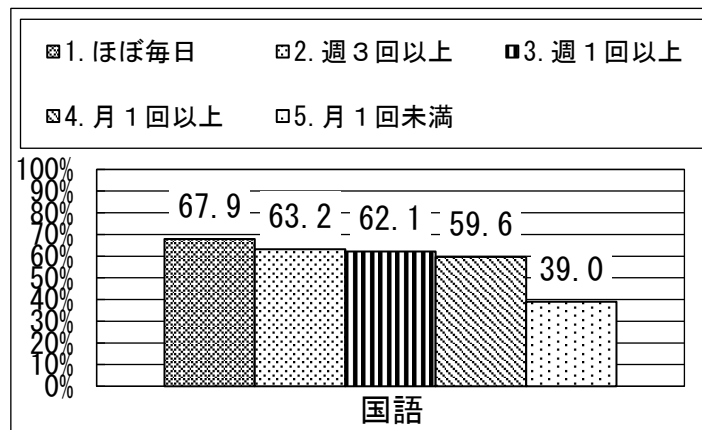
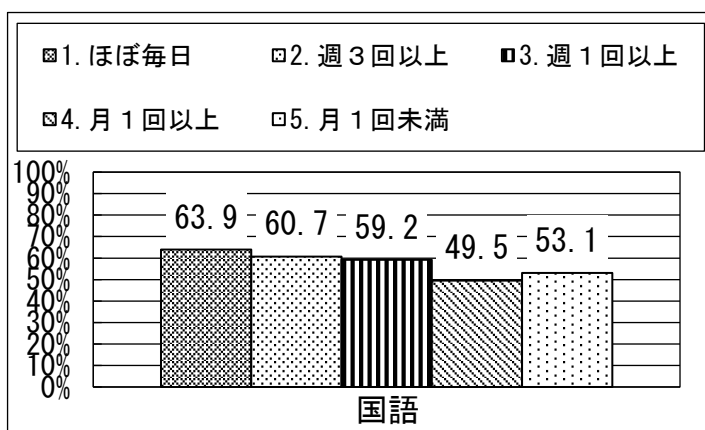
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



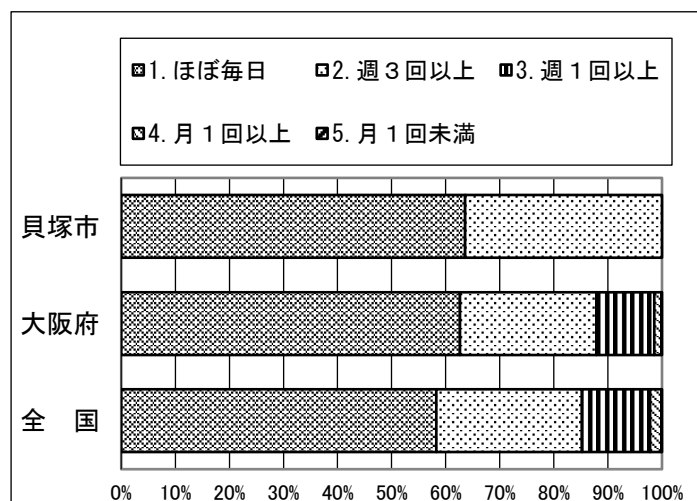
4ー(1)の質問項目のグラフは、「5年生(1、2年生)までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。」という問いに回答した児童生徒の割合を表したものです。

小学校中学校ともに、「ほぼ毎日使っている」と回答した割合が、全国平均を大きく上回っていて、小学校では約50%、中学校では約45%の児童生徒が「ほぼ毎日使っている」と回答しています。令和2年度からのGIGAスクール構想でのタブレット導入を機に、タブレットを活用しての授業について、すべての学校で研究を進めてきました。その成果として、児童生徒にとって、学習のための道具としてタブレットを授業で使うことが定着してきていることがわかります。

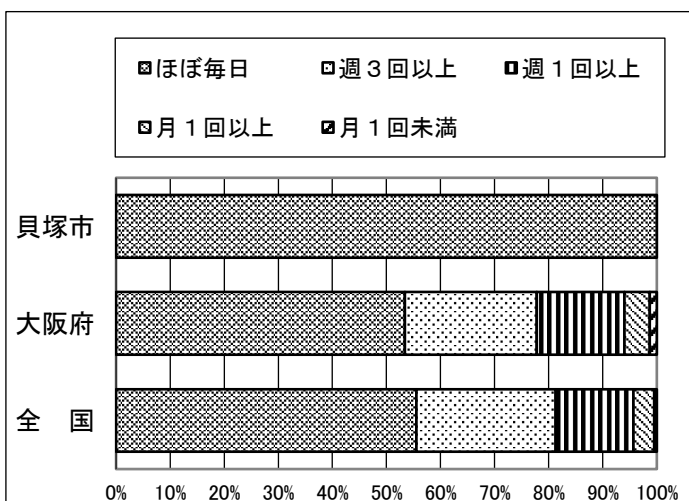
また、この質問について、クロス集計グラフからは、小中学校すべての教科において相関関係があることがわかります。小学校の全教科において、「ほぼ毎日」と回答した児童の平均正答率が「月1回未満」と回答した児童生徒の平均正答率より約10ポイント以上差があり、中学校の3教科では約20ポイントの差が出ています。

(学校質問紙の結果)

小学校



中学校



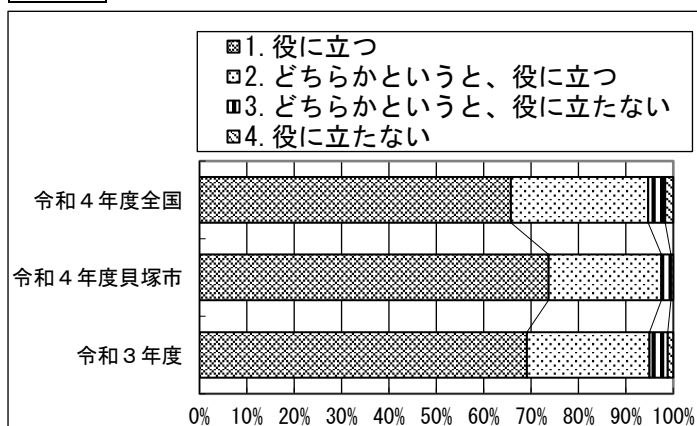
学校質問紙からも、小中学校ともに「ほぼ毎日」と回答している割合が、全国、大阪府の割合を上回っています。この結果から先生も児童生徒のタブレットの活用について、前向きに取り組んでいることがわかります。

「ほぼ毎日」という回答が、80、90、100%と、どんどん高まっていくようにすることが今後の課題といえます。

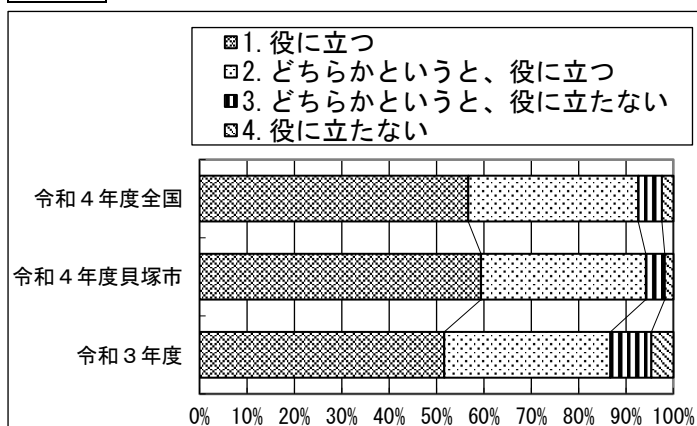
自分の考えを表現する場面、グループで考えをまとめる場面、教室全体で考え方を共有する場面などでタブレットは効果的なツールです。そのツールの良い所を生かした新たな学びの効果についてこれからも検証し、授業改善の1つとして取り入れられるようにしていきます。

4－（2）学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか。

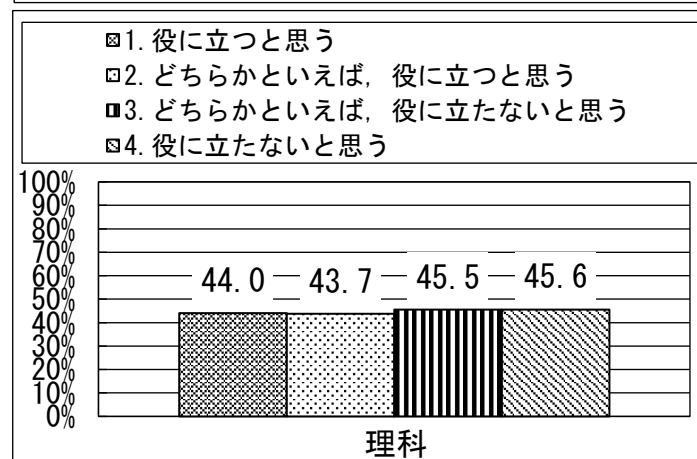
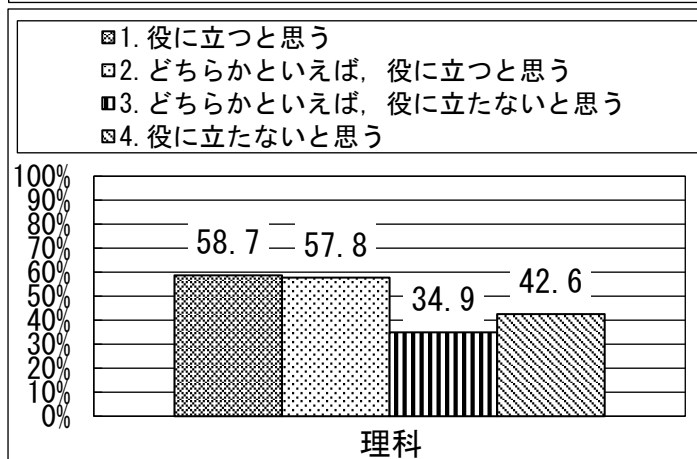
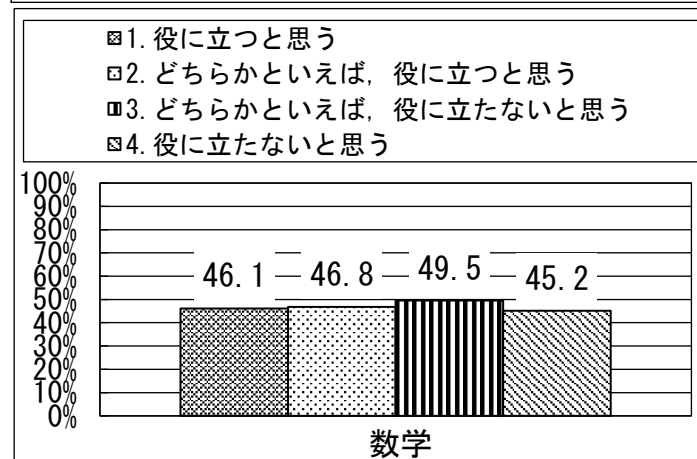
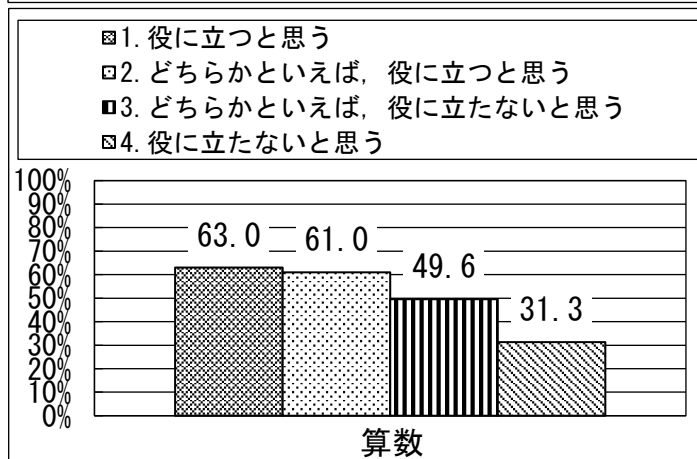
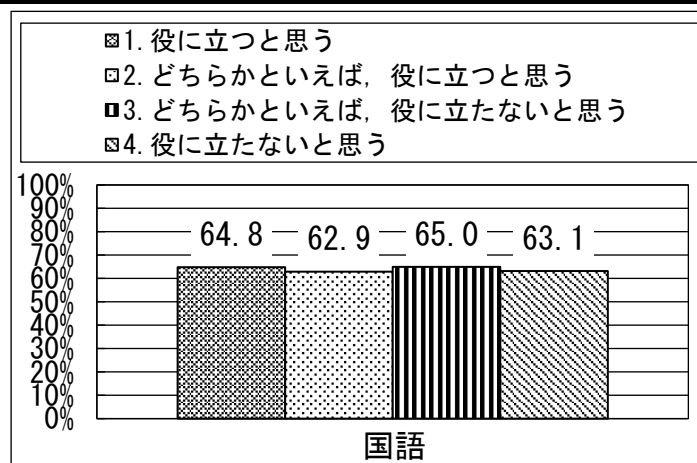
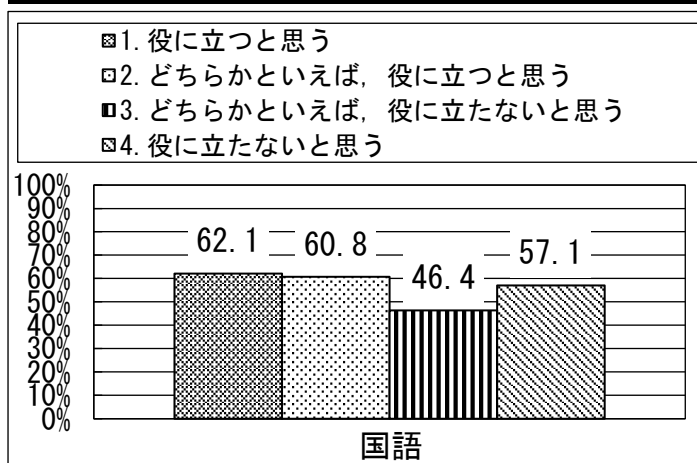
小学校



中学校



回答した選択肢別の平均正答率



4ー(2)の質問項目のグラフは、「学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか。」という問いに回答した児童生徒の割合を経年比較したものです。

小学校、中学校ともに、「役に立つ」、「どちらかという、役に立つ」と肯定的に回答した割合が全国を上回っていて、約95%の児童生徒がICTの活用について肯定的にとらえていることがわかります。

経年比較すると、小学校も中学校も令和3年度から肯定的回答が増加していて、「役に立つ」と回答した割合は、小学校では約4ポイント、中学校では約8ポイント増加しています。

また、この質問について、クロス集計グラフからは、小学校算数・理科以外では相関関係があるとはいえませんでした。小学校では、「役に立つ」と回答した児童の平均正答率が「役に立たない」と回答した児童生徒の平均正答率より、国語では約5ポイント、算数では約30ポイント、理科では約16ポイント高くなっています。

令和3年度と比較すると、「タブレットは学習に役に立つツールである」という児童生徒の意識は高まってきていることがわかります。児童生徒の意識を受けて、授業において、ただ使うのではなく、どの場面で、どのように使うことが効果的なのかを考えて、活用する力を育成していく必要があると考えています。タブレットを活用した授業実践の交流や研修を通して、先生たちの活用スキルを上げることで、授業でのタブレットの活用率や効果的な活用を進めていこうと考えています。

また、「役に立つ」という回答の小学校と中学校の違いが10ポイントあることが今後の課題であると考え、中学校でのタブレットの効果的な活用について研究を進めていきたいと思います。

4. 今後にむけて

全国学力・学習状況調査は、児童生徒の学習状況を把握・分析するための1つの手段です。子どもたちに育成すべき資質・能力をつけることができているのかを、この調査で検証します。

今回の分析結果を、学校・家庭・教育委員会で共有するとともに、学校は、子どもたちが「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」の視点で、今後の授業づくりに向けて以下の内容を中心にして取り組んでまいります。

○子どもたち一人ひとりの学習状況を丁寧に把握し、個に応じたきめ細かな指導を行うことで、子どもたちが安心して取り組み、「わかる」授業を進めます。

○子どもたちの学校での様子や取り組み内容が、保護者の方や地域の方々にもご理解いただけるように、積極的に情報発信し、家庭・地域と連携した取り組みを工夫していきます。

○家庭学習の仕方や効果的な方法について提案し、子どもたちが計画的に学習に向かうことができる仕組みと学習習慣の確立を図っていきます。

○数値で図ることのできない「非認知能力」を育むことで、「自己有用感」「自己肯定感」の向上を図るとともに、学力テスト等で表される「認知能力」の向上も図っていきます。

○タブレットを活用して「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりを推進します。

これらは、児童・生徒質問紙から、特に学力と高い相関関係のある項目を中心に抜粋したもので、子どもたちの生活をみとめるための重要なデータとなっています。

今回の全国学力・学習状況調査の分析結果をふまえた課題を共有し、学校と家庭で協力し、子どもたちの健やかな成長を促していきたいと考えます。

また、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等、Society5.0という言葉に象徴されるように、子どもたちが成人して社会で活躍する頃には、我が国は今以上に、加速度的に変化する予測困難な時代を迎えていると予想されます。そのような時代を生き抜いていくために、「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」の育成をめざしてまいります。